社会人が送る、
二度目の学生生活
TrymenT
脚色 えある
原作 TrymenT
II
TrymenT

TrymenT

今を変えたいと願うあなたへ

YoU KnowS ThE DeaR KnowS

Ⅱ

TrymenT CharacteR RolL

登場人物名簿

箒木日向子（ははきぎひなこ）

ミリャ

新田　司（にったつかさ）

海蔵もも（かいぞう）

佐藤理人（さとうりひと）

三国義貴（みくに よしたか）

普通の学園生活

この世界は醜悪なのだと、いつか誰かが言っていた。
智に働けば角が立つ。情に棹させば流される。
とかく人の世が生きにくいのは、どうも昔かららしい。
千差万別、十人十色。多様性だと、それを受け入れるべきなのだと、誰もが口にはするけれど。
理想と現実。光と影。相対するその落差を、人は容易には埋められない。

……少女がペンを走らせる。
とある孤島、その一軒家。二階にあたるその部屋には、あたたかい春風が流れ込み、彼女のその長い髪をなびかせていた。
きらめくような白い髪。透き通るような白い肌。人並外れた容姿とその佇まいが相まって、人によっては彼女が人間ではないかのような錯覚を覚えるかもしれない。
窓の外には大きな桜の木。花弁が舞い、そのいくつかは部屋の中へと吹き込んでくる。
窓際の机。彼女はひとり、便箋をしたためていた。

万感の思いを込めて、それはまるで、親愛なる誰かへと捧げるかのように。
――人は、弱さを否定する。
自分の弱さに目をつむり、他人の弱さを否定する。悪いのはだれそれだとうそぶいて、世界に澱が溜まっていく。
生きにくい人生。山積する社会問題。それらにどうにかこうにか折り合いをつけて、人は己が人生を歩んでいく。
自分のことだけで精いっぱい。そこに悪意はないけれど、同じくらいに余裕もない。自己犠牲が尊いのは、それが容易ではないからだ。誰もがそれを理想とし、理想であるがゆえに現実とはなりえない。
でも、それではだめなのだと。
この世界を救済したいのだと、かつて誰かが囁いた。
……桜の花びらがちらりと視界を横切り、彼女はふっと顔を上げる。
陽光に照らされた、大きな大きな桜の木。
つられるように、彼女は立ち上がる。古びた椅子が、きい、と小さな音を立てた。
「人が求める楽園とはなにか」
平等。平和。繁栄。秩序。哲学的な問いかけに、唯一の解はありえ

ない。
　けれど、それでも、より「良い」世界はあるはずだと、どこかの誰かが考えて。
「それがもし、誰もが納得できる平和な世界だとしたら――」
　ありえない空想。
　平和とは。正義とは。それは人類が幾千年を経てもなお、答えが出ない命題だ。
　それでも彼女の瞳には、強い決意の色があった。
　春の日差し。その奥に幻視するのは、きっとかつて彼女が思いを寄せた人々の姿。
「そんな世界を創ろうとする者がいるならば、私はその人の願いを叶えるために」
　続く言葉は、彼女の決意の表れか、あるいは他の感情か。
　問いかける者はなく、彼女は虚空に手を伸ばし、告げる。
「心を捨てて臨もう」
　これは、そんな「楽園」の話であり――
――その、再挑戦の物語だ。

カーテンの隙間から朝陽が漏れて、青年――新田司(にったつかさ)の顔が照らされる。
ゆっくりと開く目蓋。
天井を見つめ、目を伏せて。やや遅れて、自分が起きたことに気がつく。
上半身をゆっくりと起こし、めくれた布団を見下ろした。
「…………」
視線の先。
頭の形に凹んだ枕に、陽があたっている。
「……変な夢、見たな」
額に手を当てて呟いてから、立ち上がってカーテンを開いた。
あたたかい陽が部屋に満ちる。
窓を開けると、微かな波の音が聞こえた。
「……もう一ヵ月か」
窓の外に目を向ける。
桜が舞う島。さわやかな空気に、司は小さく深呼吸をする。
このトライメント計画に参加して、一ヵ月。基本の課題は終了し、島の環境にも慣れた頃合い。司は伊砂という名の女性職員が担当するクラスで、比較的穏やかな日々を過ごしていた。

「理人はもう出たのか」
佐藤理人（さとうりひと）は、司のルームメイトだ。
まだ一ヵ月だけの浅い関係。
少しばかりお調子者な理人と、どちらかというと寡黙で優等生な司。
それでも特に衝突もなく、少なくともここまではうまくやれている。
時計に目をやれば、時間にさほどの余裕はない。
「俺もそろそろ出ないと」
手短に朝の支度を済ませ、司は制服に袖を通す。
司も理人も、もう学生というような身分ではない。
それでもひと月もすれば、この不思議な島での生活も慣れたものだった。
寮から来夢学園へと続く道は、海風と桜に満ちていた。
司が鞄を手に、ひとり、学園の道を歩いていく。

そこに、後ろから声を掛けた人物がいた。
「新田君、おはよう」
「ああ、箒木さん、おはよう。今日は眠くなさそうだね」
「うん、結構ここの生活リズムにも慣れてきたかな。ここで頑張るって決めたし、みんなにも大口叩いちゃった手前もあるし」
――箒木日向子（ははきぎひなこ）。
彼女は社会人生活を始めてみたはいいものの、そこは今でいうブラック企業で、心身共にダメージを負った状態でこのトライメント計画に参加してきたという経歴の持ち主だ。
黒髪のロングヘアを背中に流し、すでにお酒が呑める年齢な割には、やや童顔な女性。本当に学生であると言い張っても、きっと誰も違和感を覚えないだろう。
クラスメイトの評判は上々。頑張り屋なのは誰の目にも明らかで、それがまた企業で心を折られた原因でもあった。
今を変えたい強く願う彼女は、その旨を自己紹介および学園のスピーチで発表したことがあり、それ以来、色んな人から一目を置かれる存在である。
少しだけ、司は自身の手のひらをさすった。
荒っぽい、[illegible]

続いて、また別の女生徒の声が上がる。
「よく言うよ、部屋から出てきたときはまだこ一んな目だったじゃないか」
「お、大舘さん！　それは言わない約束というか……」
「大舘さん、おはよう」
「おはよう、新田君。今日はひとりかい？」
「そうだね。理人、たまにこういう日があって」
――そうなのか、と頷くのは大舘流花（おおたてるか）。
彼女もまた社会人経験者だが、その経験は日向子よりも長い。歳はクラスの中でも年長なほうで、その性格とも相まって他人をリードする役割が多い。それでも制服姿に違和感がないのは、彼女が容姿が整っているせいでもある。
　うっすらと青みがかった髪をやや短めに切りそろえている一方で、余った髪を一部のみ編んで型へと流している。スタイルもよく、その姿勢の良さも相まって、立ち姿は凛としたものだった。
　年の近い姉がいて、彼女もまたトライメント計画の参加者という話。第二地区、と呼ばれる場所で行われている別のグループに参加中で、姉さんはどうしているかな、が大舘流花の口癖だった。
「司もたいがい、ふらっとどこかへ行ったりするじゃないですか。似た者同士ってやつじゃないですか」

た者同士ってやつじゃないですか？」
「ももちゃんも、おはよう。そんなに俺たち、似てるとは思わないけど……」
「おはようございます！　いやいや、当人たちには分からないかもですが、結構似てると思いますよ。ねぇ、流花？」
——そう言って大舘流花の後ろから元気に飛び込んできたのは、海蔵ももも。

日向子、流花と比べると、彼女の幼さはやや際立っている。やや低い身長に、金髪の長いツインテール。その振る舞いからも元気な子供のようだが、しかしその実、彼女は人工知能の研究者として知られた存在でもあった。
すでに大学の学生という身分では収まらず、いっぱしの研究者として論文を書き、界隈でもそれなりに知られた存在。とはいえその天才性もどこへやら、普段の暮らしではルームメイトの流花の世話になりっぱなしである。
なお、彼女のタブレットには、彼女が開発した高性能ＡＩ「トト」が入っており、状況によっては普通に会話に参加してきたりする。反応がないところを見るに、いまは鞄の中で沈黙しているようだった。
「あー、まあなあ。いやでも、一緒にしたら新田君に失礼か……」

「大館さん、それはそれで理人君に失礼なのでは……」
「ほらほら、とにかく遅れないうちに行きますよう！　司もほら、のんびりしてないで！」
「あ、ああ、うん。今行くよ」
　そうしてももを筆頭に、日向子、流花、そして司は、今日も来夢学園へと向かったのだった。

・
・
・

「さて、トライメント計画が始まって一ヶ月が経過しました。今の生活に慣れてきたところで、以前説明した通り、これからは選択授業を実施します」
　ホームルーム冒頭。生徒たちが着席する前で、壇上の伊砂がそんな話をし始める。
　椅子に座る生徒達は、伊砂の話に耳を傾けていた。
「選択科目は、資格試験の取得コース、自由学習のコースの二つ。一

週間後から、選択したコースでの授業が始まります。入学時に説明した通り、上半期はこの選択授業が、計画における皆さんの結果への大きな足がかりとなります。自分で考え、選び、実行した結果が、自身にとってどういう価値のあるものか。それを客観的に調査し、適切な目標を導き出します」

　一呼吸おいて、伊砂は話を続ける。

「下半期は、この目標を実現するために過ごし、卒業後の展望を明確にしていくことになると考えてください。詳しい内容は今朝タブレット端末に送信された情報に書かれています。より具体的な補足説明と質疑応答は週明けの放課後に改めて行います。気になるかたは任意にて参加ください」

　伊砂は言葉を切って、教室を見渡した。

　生徒たちの真っ直ぐな目が、伊砂を見つめていた。

「それでは、ホームルームを終わりにします」

・・・

ひととおり授業が終わった後、多くの生徒たちが図書館へと向かっていた。主な目的は今月分の適性検査を済ませることで、ついでにコース選択の調べものと相談ができれば、という感じだった。
そんな流れの中に、大舘流花もいた。
「あれは……」
そんな流花が、前方、見慣れた黄色いツインテールがいることに気が付く。
流花が近づいても、そのツインテール――海蔵ももは手元のタブレットから顔をあげなかった。
「おい、歩きタブレットはやめろ」
「あたっ」
流花がももの頭をチョップの形で軽く小突く。
ももは大げさに叩かれたところを撫でながら、流花を見上げた。
「しょうがないですねえ」
「なんで偉そうなんだ」
流花はあきれたようにため息をついて、ももの隣を歩き始める。
「選択授業、ももは自由学習コースだよな」
「んー、どうしたものですかね」
「あれ？　そこ、悩むところなのか？」
「ンー。まぁ」

「あれっ。ももは当然、資格より自由学習かと思ってたんだが……」
流花は腕を組み、顎に指をあてて考えた。
ももが流花を見上げる。
「流花はどうするんですか？」
「あたし？　あたしは、司法業務機械処理取り扱い試験をとりあえず。他は改めて探してみるつもり」
「ああ、司法ＡＩ処理試験ですか」
「なんだ。知ってるのか」
「バカにしないでください。一応ももちゃんの専門分野ですからね」
「……はあ、ももといると学習が捗って助かるよ」
「ん、どういう意味ですか？」
「べつに」
軽口を言い合って、そのまま二人は図書館へ。
図書館に入って早々、ももはあたりをきょろきょろと見渡し始める。
「どうした？」
「あ、いえ。なんでもないです。適当に座りますか」
図書館は比較的混んでいた。
とはいえ生徒の数から考えるとかなり広い図書館だ、席に余裕は十分ある

分ある。
並べられた机の一つを選び、流花とももが席につく。
「あ、大舘さん、ももちゃん」
さてじゃあまずは――と調べものを開始しようとしたところで、声。
「ああ、日向子。おはよう」
「日向子さん、おはようございます」
「うん、おはよう。隣、いいかな？」
「ああ、どうぞ」
日向子が流花の隣に腰を下ろす。
「あ、やっぱり二人もまずは適性検査から？」
「ですです。日向子さんも一緒にやりましょう！」
「うん、もともとそのつもり」
それぞれが、適性検査の用紙を取り出す。
中身はともかく、見た目は通常のマークシート形式の筆記試験のようなもの。自然と気合が入る。
「さて、じゃあちゃっちゃと済ませちゃいますか」
流花の声に、三人がそろって筆記用具を手にしたのだった。

ももは手元のタブレットを操作して、画面をたてるように机においた。
　そうしてそのまま席を立つ。
「それじゃあ、トト。よろしくです」
「はーい！　かしこまりです！」
　ももがタブレットの画面に声をかける。
　画面のなかでひょこひょこ動く女の子のキャラクターが、それに笑顔で答えた。
「ん、もう終わったのか？」
　流花がももの様子を見て尋ねる。
「まあ、そうですね。この試験、どういう処理にかけられるのかは分かりましたし」
「……それがわかったところで早くなるものなのか？」
　流花がワンテンポ遅れてから言葉を返す。
「処理が分かれば、あとはそれに応じたアルゴリズムを組むだけです。ももちゃんの中で辿り着く答えはわかっていますから」
「はあ。素直に感心するわ」
「ひえー。私まだまだかかりそう……」

黙々と手元のタブレットに集中する流花と日向子。
二人に挟まれたももは、タブレットを鞄にしまった。
「それじゃあももちゃん、館内をぶらぶらしてきます」
「あいよ」
「ももちゃん、お疲れ様」
顔を上げた二人に対して、ももは大きなピースサインを突き出してから、その場をあとにした。

一般書籍が並ぶメインフロア。
それとは区切られたエリアに、マンガ・映画の貸し出しコーナーがあった。
他のエリアに比べて極端に人が少なく、ひとりの青年——司以外の影はない。
「……」
並べられた背表紙を眺めながら、司は何かを探し求めるように、本棚の間を歩いていた。
あいうえお順に並べられた数多のタイトルを流し見ていく最中、ふと、本棚に1冊分の空きがあることに気づく。

おもむろに司はタブレットを取り出して、空いたスペースにあった本をデータベースで確認する。
親愛なるあなたへ、という題名が画面に表示された。
貸出中。借りてるのは二上ユウ、という名前の人物だった。
「あっ。つーかさっ」
「えっ」
すると司の死角から聞き覚えのある声。
振り向くと、見慣れた顔が駆けてきていた。
「ももちゃんっ？」
司がタブレットを後ろに隠しながら、少しうわずった声を上げる。
「こんなところにいたんですかー。あれ、ということはもう適性検査のレポート終わったんですか？」
「いや。それが、機械の不調とかでエラー吐いてたみたいでさ。このあと再検査するみたい」
「それはなんとも面倒ですねえ」
ももは司の背後をのぞきこんだ。
「えいっ」
かけ声をあげながら、両手を司の腰に回す。
司の横腹に、もものやわらかい頬が押しつけられた。

ももの両手が、司のタブレットを奪おうと何度か空を切る。

「ちょっ」

咄嗟に、司はタブレットを頭上に掲げた。

「あ――っ」

両手を伸ばして、ぴょんぴょんと跳びはねるもも。

司は苦笑いで見下ろす。

「い、いじわるっ、しないでっ、ください――！」

「ええっ……！　それはこっちの台詞じゃないかなっ……」

「はっ！　とっ！　そっ！　うっ、うぅっ……そっちがそういう手段に出るなら……それっ！」

指を大きく開いた手で、ももが司の脇腹をくすぐる。したり顔で肋骨のあたりをせめるが、司の表情は変わらない。

「って、あれっ!?　効いてないっ!?」

「ももちゃん、わかったから……」

司がゆっくりと両手をおろす。

意図を察して、ももも司から一歩離れた。

司が差し出したタブレットを、ももはらんらんとした目で見つめる。

「はい」

「やった――っ。まったく、一体なにを隠していたんですか」

タブレットを受け取り、電源を入れる。
直前に開いていた画面が浮かびあがり、『親愛なるあなたへ』のページが表示された。
「ん……。マンガ、ですか？」
「あ、うん。……探してたんだけど、貸し出し中みたいだね」
「んん一？　本当に、これを隠してたんですか？　まだなにか、隠してるんじゃないですか」
ももはタブレットを操作して、起動中のアプリケーションを確認する。
「誰もいなかったから驚いただけだよ」
「え一。つまんないです」
ももは頬を膨らませながら、司にタブレットを返した。
「あはは……」
「あっ！」
そこでももはなにかを思い出したように、両手をぱんと叩いた。
乾いた音が静かな図書館に響く。
「ん？」
「そうでした。司は選択授業、どうするんですか？」
「ああ……まだ決まってない。ももちゃんは自由学習？」

「むー。やっぱり、ももちゃんはそういうイメージですか……」
「まあ、あの二択だとね。……ももちゃんも悩んでるの？」
「うーん。選択授業に悩んでいるというよりは、これからどうしようかなって感じですかね」
いつもより少し低い声でももは言った。
含みのある返答に、司が問いかける。
「研究とかは？」
「それはもちろん、やるんですけどね」
「なるほど……」
ももは首をかしげて、小さくうなりながらまだ考え続けていた。
「ももちゃん」
「はい？」
「立ち話もなんだし、中庭でも行かない？」
「えっ？」
司の顔を見上げたまま、ももの動作が一瞬とまる。
「い、行きます行きます！　あ、あー……ちょ、ちょっとだけ待ってもらっていいですか？　えっと、机に置きっぱなしにしている荷物を回収してくるので」
「あ、うん、そうだね。じゃあ図書館の入り口集合で」
「はい！」

い！」
　そうして荷物を回収してきたももと合流し、二人そろって中庭へと向かう。
……中庭の桜は満開だった。
　そこに、春の日差しが惜しげなくさしこんでいる。
　中庭の端には少し大きめの広場と、比較的大きな自販機。ももは早速自販機に向かい、がこん、と大きな音を立ててジュースを取り出した。
「オレンジジュース？」
　司の問いかけにももは振り返り、買ったばかりのペットボトルを突き出す。
「果汁１００％ですっ」
　司は目の前にペットボトルのラベルを見て、少し笑った。
　周囲を見渡し、桜の影の下の木製のテーブルと長イスに目をとめる。
「あそこに座ろうか」
「そうですね」
　二人は長イスに向かい、隣り合って座った。
　司は鞄からペットボトルのお茶を取り出し、一口飲んでからテーブルに置く。

「実はさ、ももちゃんに聞きたいことがあって」
「ももちゃんにですか？」
「うん。ももちゃんって、いわゆる研究っていうのに取り組んでると思うんだけど、なんていうかな……」
司が言葉を探す。
ももは司の横顔を眺めながら、続きを待った。
「そう、研究者になるための道のりって、どんな感じなのかなあと」
「道のり……ふむ」
ももは前を向いて、遠くを眺めた。
ペットボトルを少し傾けて、少量を口に含み飲み込む。
小さな声で、うーんとうなる。
もう一度ペットボトルに口を付けて、冷たい液体で口内を満たす。
それを飲み込んでから、口を開いた。
「そうですね……。正直言いますと、ももちゃんも適切なアドバイスができるかちょっと怪しいです」
「というと？」
「ももちゃん、両親も研究者でして、昔から研究室に連れて行ってもらう機会は多くてですね。そこで研究に混ぜてもらったり、手伝ったりしている内に、気づいたら研究者と呼ばれるようになっていたので」

「……」
「ああ、なるほど」
「通常どういった道のりを歩むかについては、あまり詳しくありません。大学院に進んで博士課程まで終われば、まあ、一般的には研究者と名乗って差支えないのでしょうけれど。あとは企業の研究職とかですかね、よく聞くのは」
ももはそこまで、落ち着いた口調で一息に言った。
司はももの横顔を見つめながら聞いていた。
テーブルの上に一枚の花びらが舞っていた。ももがそれを目で追う。
日差しを受けるテーブルの木目に、花びらは落ちた。
ももは、ぴたりと止まったその花びらをしばらく見つめてから、もう一口オレンジジュースを飲んだ。
「……ですが、なにかを突き詰めたいという想いがあるのであれば、それを解き明かすために行動することがスタートになると言えるのかもしれません」
ももは、手の中のペットボトルのラベルをぼんやりと見つめながら言葉を続ける。
「ももちゃんは、人工知能の研究を行っている訳ですが、この研究もまた、人間の知能の原理を解明するという目的から始まったものなん

「ですよ」
……なるほど」
ももは言葉を切り、司のほうを見る。
司は、真剣な面持ちでももの話を聞いていた。
二人の目が合う。
司はきょとんとした表情を浮かべ、ももは咄嗟に前を向いて司の視線から逃れた。
「……それにしても、研究者について知りたいなんて、急にどうしたんですか？」
「ああ、適性検査や選択授業の件があったから、自分が向いている道について考えてたんだ」
「ほほう」
「まあでも、今突き詰めたいものがなにかと言われると……」
司はそこで言葉を切った。
ももは、おそるおそる司を見上げる。
司の視線は、前方のどこか遠くに向けられていた。
「ああ、ももちゃん、ありがとうね。質問が全然まとまってないのにごめん」
「いえいえ。なんだかこういうのは照れますね」
ももは前を向いて、両手でもったオレンジジュースを傾けて口を付

ももは前を向いて、両手で持ったオレンジジュースを傾けて口を付ける。

　するとその時、司とももの間からぬっと腕が割り込んできて、未開封の炭酸飲料がテーブルへと置かれた。

　二人が振り返る。

「リヒトがログインしました」

「うわっ」

「ひゃあっ」

「おっとごめん。待たせたね」

　現れたのは司のルームメイト、佐藤理人だった。

　司とは対照的な、どこか飄々とした態度の青年。机をぐるりと回り、テーブルを挟んで二人の反対側に立つ。

「呼んでないよ」

「そう言わずに」

　ニコニコと微笑みながら、理人が二人の正面に座る。

「図書館に居ないと思ったらこんなところに。司はともかく、ももちゃんは適性検査レポート終わったの？」

「終わりましたけれど、なにか」

　ももは、やや鋭い目つきで理人を睨みつけながら言った。

「えっ……。司、僕、出直した方がいいかな？」

「ん、なんか用があったんじゃないの？」
「いやまあ、そうなんだけどさ」
理人が、司からももに視線を移す。
「なんですか理人。用件があるなら言ってください」
「あーうん。じゃあ、単刀直入に」
司とももが理人を見つめる。
「君たち、自由学習コースで一緒にゲーム作らない？」
理人は、二人の顔を交互に見やってから、言った。

・
・
・

タブレットを片手に、流花は人の流れに逆らって歩いていた。
目的は職員室。コース選択について、質問があったためだ。
質問事項を考えながら、無意識に人を避け、廊下を進んでいく。
「……？」
ふと顔を上げた流花は気がついた。
前方から歩いている人達が、一様に同じ場所に視線を向けている。
流花はその視線を辿り、振り返った。

流花はその視線を辿り、振り返った。
「ん？」
その目に、一人の小柄な少女の姿が留まる。
――たしか名前は、ミリャ・ブランコ。
不思議な雰囲気をまとった、どこかうつろな少女だ。
トライメント計画の参加者のひとりであることは周知されているものの、正しい意味でクラスに「出席」はしていない人物。まあ、いわゆる保健室登校のようなものだと聞かされている。
見かけることも稀であり、彼女が噂のミリャ・ブランコその人である、ということを知っている人も多くはない。
そんな件の人物が、廊下にひとり佇んでいた。
窓から呆然と空を見上げている。
ミリャの視線を追って流花も空を見上げる。
青く澄んだ空と、白い日差しが見えた。
「…………」
流花の視界を、羽ばたく鳥が横切る。
ハッと、再びミリャに視線を戻す。
そこにはもう誰もいなかった。
「……？」
後頭部をかきながら小さなため息をついて、流花は前を向く。

目の前に、別の女子生徒の顔があった。
「うわっ」
流花はとっさに体を引く。
「こんにちは！」
距離に見合わない大きな声であいさつをする少女。
流花は呆れたように額を押さえる。
ミリャと入れ替わりに元気に表れたのは、中村夏奈（なかむらかな）。同じくトライメント計画の参加者だ。こちらは普通に登校していて、まあ、良くも悪くも目立つ人物だった。
「きみもまた、神出鬼没だな」
そう言われた夏奈は満面の笑みを浮かべる。
「大舘さん、質問なんだけど！」
「学園七不思議？」
「!!」
流花は腰に手をあてて答えた。
夏奈の表情に驚愕の色がひろがる。
「すごい！　どうしてわかったの!?」
「いや……いつもそんな大きな声で聞きまわってたら、嫌でも耳に入

るよ。同じクラスだし」
流花は小さくため息をつく。
「それで？　言っておくけど、あたしは七不思議になるような珍しいネタは持ってないからね」
夏奈は笑顔のまま流花をじっと見つめていた。
流花はそれを、訝しげに見下ろす。
ふと、夏奈が拳で手のひらをポンと叩いた。
「大舘さん、新田くんと仲いいよね」
「ん？　ああ……まあ、グループも一緒だったしな」
「新田くんがオカルト好きで、幽霊と交信してるって本当？」
ずずいと、いっそう流花ににじりよる夏奈。
流花は首を傾げた。
「話には聞いていたけど……本当にそんな噂があるんだな。残念だけど、あたしは新田くんについてはあんまり知らないよ。ていうか、直接本人に聞いてみれば？」
「聞いたけどだめだった」
「まあ、そうか……」
流花は口に手を当て、しばし考えた。
夏奈も同じポーズをとって、なにかを考え始める。
「うーん、やっぱり情報を聞き出すためには相手の弱みを握らないと

だめかな――……」
「えっ」
「あっ、そうだ！」
夏奈が勢いよく顔を上げる。
「大舘さん、ももちゃん知らない!?」
「あいつは――……多分、まだ教室にいるんじゃないかな」
「よかった！　じゃあ、教室いってくるね！」
夏奈が一歩後ろにさがり、手をぴんとあげる。
「はいはい、いってらっしゃい」
夏奈は手を大きく振りながら去っていく。
その背中を、流花はしばらく眺めていたのだった。

――図書館。
職員室で確認事項を済ませた流花が図書館へ戻り、こちらはずっと調べものをしていた日向子と合流を果たしてしばらく経った後。
流花と日向子が使っていた机の前へ、小さな影が現れた。
「やっぱりここにいました！」

慌ただしく現れたのに、ももたった。
手に持ったタブレットをテーブルに置いて、二人の顔を交互に見る。
「二人とも、このタブレット……もとい、トトを匿っておいてください！」
「かくまう？」
いったい何の話だろう。
日向子の問いかけに、ももが力強くうなずく。
「夏奈がトトを調べさせろって追ってくるんですよう〜！　もうしつこくてしつこくって！」
両手をブンブンと振りながら、ももは言った。
日向子と流花が目を見合わせて苦笑する。
「あー、これは藪蛇だったかな……。選択授業が始まる前からあの行動力は、ある意味見習うものがあるけどね」
「あ……あれってそういう目的だったんだ……」
日向子が言い終わらないうちに、ももが二人の肩に手をおく。
「とにかく、よろしくお願いしますね！　ももちゃんは理人と仕様書を作らないといけないので！」
「仕様書？　ああ、ゲームを作るって言ってたやつか」
「えっ、ももちゃん、ゲーム作るの？」

「そうですけど……ええと、その話はまた後ほど！」
　タブレットを再度差し出して、ももが急いで机を離れる。
　かと思えば、一度、ぴたりと歩を止めて。
「あっ、流花。今日はご飯食べてきちゃうので！」
「はいよ」
「では、さらばっ」
　小走りでももが去っていく。
　日向子はももの背中が見えなくなってから、テーブルのタブレットをじっと見つめる。
「えっと……どうしよう？」
「あー、調べものの進捗もよくないようだし、ちょっと休憩してきたら？　トトを持ってさ。中村さんが来たら、適当にごまかしておくから」
「あ、じゃあそうしようかな」
　流花の勧める通りに、日向子が一度調べものの手を止める。そうしてもののタブレットを持って、日向子は中庭へと向かうのだった。

中庭の桜の花びらが舞う。
タブレットを両手に持って歩いてきた日向子が、その様子を見上げる。
「まったく、流花は真面目ですねえ」
日向子の持つタブレットのスピーカーからトトの声がした。
画面内のトトは、拗ねたような表情をしている。
「大館さんは集中するのと遊ぶのをしっかり分ける人だからね。学園にいるうちは勉強、って決めてるんだよ」
「いいえ、寮に帰ってもいつもあんな感じですよ」
タブレットに微笑みかけながら、日向子が言った。
「……うん、そうだったかも」
日向子は苦笑いしながら言った。
トトは画面から日向子を見上げる。
「日向子さんはよかったんですか？　図書館で勉強しなくて」
日向子はキョトンと目を丸くしてからうなずいた。
「今日の分は終わったからね。ちょうど外の空気吸いたいなーって思ってたところだったし。それに、こうやってトトちゃんと二人きりっていうこともなかったから、お話しできるならそれもいいかなーなんて」
「……そういえば私も、もも以外の人と二人きりというのは初めてか

もしれませんね……」
　トトが呟くように言った。
「そうなんだ？」
　トトがうなずく。
「私はここから動けませんし、基本的にはずっともともと一緒でしたから」
「……なるほど」
　日向子が手元のタブレットから顔をあげる。
　口を少し開いたまま、何度か小さくうなずいてから、再び視線を手元の画面に戻す。
「それじゃあ、今日はトトちゃんのやりたいことに付き合うよ」
「本当ですか⁉　じゃ、じゃあ……っ」
「あ、また新田くんをストーカーしようとか、そういうのはなしだよ？」
　トトの動きが止まる。
　このトトには、司に対する前科があった。ももが司に関心があるために、司に対する敵愾心がすごいのだ。その延長でトト主導で司の正体を暴け、みたいな行動をしたことがあり、日向子はそのことを指摘したのだった。

「……そんなことは考えていませんよ」
そう言ってから、にこりとトトが笑う。
「うーん……どうしましょう……。なにか、ももの役に立てることがあればいいんですが……」
「トトちゃんがしてみたいことはないの？」
日向子に声をかけられ、トトが顔を上げる。
「もものためになることならなんでも！」
「そ、そっか。……ももちゃんのためになること……なんだろう」
目を瞑り、うーんと唸る。
トトは手のひらを拳でぽんと叩いた。
「あっ」
「ん？」
「あの、私、ミリャさんとお話ししてみたいです。あのかただけは、まだお目にかかったことがないので……」
「あれ、そうだっけ」
トトがうなずく。
そのあとですぐ日向子は、はっと息をのんだ。
「あ、でも、ミリャちゃんは……」
「はい、わかっていますよ」
トトが散笑んで手を広げる。

「私がお話ししてみたいのです」
日向子がトトを黙って見下ろす。
それから微笑んでうなずいた。
「うん、それじゃあ、探してみよっか。大舘さんも会ったって言ってたから、たぶんまだ学園に居るだろうし」
「はいっ」

「……………」
建物のかげに隠れた日向子が少し身を乗り出して、反対側の歩道を見つめる。
視線の先を、ミリャが歩いていた。
そしてその半歩先を、司が歩いている。
日向子は建物のかげに身を戻して、下唇に指をあてた。
「……どうしてこんなことに……」
「どうですか、やっぱり例の場所へ向かってますよね!?」
日向子が手元に視線を落とす。
タブレットの画面の中で、トトがぴょこぴょこ跳ねていた。

「あ、うん……そうだねぇ」
ぎこちなく口角を上げて、日向子が言った。
「なにかあるんですよ、絶対」
トトは画面内で、うんうんとうなずいていた。
「いやあ、思ってもみない収穫でしたね！　うまくいけば、アイツの秘密を解き明かして、噂の幽霊も突き止めて、一石二鳥です！」
楽しげなトトが、タブレットに映し出されている。
――「アイツの秘密」「噂の幽霊」とは、司に関する噂のことだ。
司はどこか不思議な雰囲気があるうえに、ふらっとどこかに消えてしまうことがあり、「彼はこの島で幽霊探しをしているのでは」なんて話がまことしやかにささやかれているのだ。
中村夏奈が司を「七不思議」扱いしていたのもそのことで、司本人は当然のように否定しているものの、夏奈やトトはそれを「何かを隠している」と考えているらしい。
「…………」
日向子はトトから目を逸らして、しばらく黙っていた。
日向子とて、司の不思議な行動に関心がないわけではないのだ。もちろん、それがオカルトがらみだと信じているわけではないのだが……。
「日向子さんには申し訳ないですが、もう少しお付き合いを

あっ!!　日向子さん、後ろ！　ミリャさんとヤツが急に走り始めました!!」

「えっ？」

日向子が身を乗り出して、二人がいた場所を見る。

全速力で走る司を、ミリャが追いかけていた。

「えええっ！　なんでっ!?　どういう状況!?」

日向子が建物のかげから飛び出す。

司とミリャの背中はどんどん小さくなっていく。

手に持ったタブレットが大きく揺れる。

「ああああああああ〜っ」

画面内で転がるトトが叫んだ。

日向子は息を切らしながら走るが、二人との距離はさらに広がっていく。

「はっ……　はやっ、すぎぃ」

肩で息をしながら、よろよろと日向子は走った。

が、文系女子の全力疾走はそう長く続くことはなく。

前のめりに歩く日向子が、電柱に左手をつく。

「ぜぇ……　はぁ……」

額を拭う。

手の甲に汗が光っていた。
「っはぁ……はぁ……もう……ムリ……」
日向子が息も絶え絶えに言った。
「だ、大丈夫ですか……？」
日向子の右手に抱えられたタブレットの画面から、トトが日向子を見上げている。
「ごめんっ……ちょっと……座っていい……」
「は、はい、もちろんですっ」
フラフラと堤防まで歩き、日向子は腰をおろした。
「…………」
海岸を見下ろしながら、日向子が息を整える。
膝の上におかれたタブレットから、トトが見上げる。
「日向子さん、無理を言ってごめんなさい……」
「いやいや、大丈夫だよ。こちらこそごめんね。私、全然体力なくって……」
トトはぶんぶんと首を振る。
そのあとでふたたび俯いた。
「……すみません」
日向子がトトの頭の部分を画面越しに撫でる。
トトは頭を上げて、日向子を見上げた。

トトは顔を上げて、日向子を見上げた。

「ももちゃんに、褒めてもらいたかったんだもんね」

「……それもあるんですが……」

トトは目を逸らして、小さな声で言った。

日向子は首を傾げ、トトの言葉の続きを待った。

「いつか流花も言ってたんですが、最近のももは研究者である自分を隠し始めてるんです」

「……？」

「ももは、『普通の学園生活』を送りたがっているんです。でもそれは……トトとの時間が減るということで……しかも、ももは最近アイツのことばかり……」

「アイツって……新田くんのことだよね」

トトが小さくうなずく。

「あんなの、恋に恋している乙女です。ももは……ももはもっとすごい研究者で、誰かのあとを追うような人じゃないんですっ」

トトの語気の強さに、日向子が目を丸くする。

「こ、ここここ、こいっ!?　ももちゃんが、新田くんにっ!?」

「だってそうじゃないですか。今回の選択授業だって、新田が自由学習を選んだから、ももも自由学習を選んだんですよ、絶対。……え、いや、なんで日向子さんがそんなに動揺してるんです……？」

「い、いや、ぜんぜん？　ぜんぜんだし？」
「そうですか？　それならいいですが……」
日向子がやや顔を赤らめながら、小さく息を吐き、また小さく吸い込む。
「……それで、そんなに新田くんの悪いところを見つけようとしてるんだね」
「で、でも、それに日向子さんを巻き込んでしまったことは、本当に申し訳ないですっ。流花は毎日勉強で、邪魔をするとうるさいですし、私とももはいつも一緒なので、見返す機会は今しかないと思って……」
「ああ一……なるほど……」
日向子は困ったように微笑んで、トトを見下ろした。
ゆっくりと立ち上がり、両手をひろげて伸びをする。
「よし、もう大丈夫」
タブレットの画面の中から、トトが日向子を見つめる。
日向子の視線が、海岸の端にある森林に向けられる。
「見失いはしたけど、たぶん二人はあそこにいると思うから……」
「……いいんですか？」
日向子が優しく微笑んでトトを見下ろす。
「新田くんがいたけど、ミノリちゃんがもうしっかりとうまくやれてるから

新田くん[illegible]しれないし。もう暗くなるころだから、二人の様子を確認したらすぐに帰ろうね」
「……はいっ！」

伸びきった雑草をかき分けながら、日向子は歩いた。
立ち止まり、顔を上げる。
日向子の眼前に風化した建物があった。
壁にはヒビが入り、窓ガラスはところどころ割れ落ちている。
「……」
日向子は口を閉じたまま建物を見上げていた。
しばらくそうしてから前を向き、歩き始める。
踏まれた雑草ががさがさと音をたてる。
胸元に掲げたタブレットに、日向子が視線を落とす。
トトはタブレットの中で、複数のウインドウを操作していた。
「……トトちゃんは、新田くん自身のことはどう思ってるの？　その、ももちゃんのことは関係なく、純粋新田くん自身のこと」
トトの手が止まる。

「そうですねぇ」
　トトは腕を組んで考え込んだ。
「客観的に見て、成績優秀、スポーツもかなりのもので、性格も聖人君子ですよね。確かに、そんな風には見えますが……。私には仮面を被った道化に見えなくもないですね」
「仮面を被った、道化……」
「現にこうして、右も左も分からない少女をこんな廃墟に連れ込んでいるんですから、ろくな奴じゃやねーですよ！」
「ま、まぁ、むしろミリャちゃんは自分から新田くんについて行ってるみたいだったけど、ね」
　諭すように日向子は言った。
「そういえば、ミリャさんはどうして新田についていくんでしょうか」
「うーん……前からそういうところ、ちょくちょくあったからなぁ……」
「不思議な電波を受信しているんですかね」
「あー……受信してるかもねぇ……」
　日向子とトトは言葉を交わしながら建物に近づいていく。
　廃墟の二階の窓に立つ人影が、逆光で黒く映し出されている。

その人影は、二人の姿をまっすぐに見下ろしていた。
視線に気づかないまま、二人は廃墟に足を踏み入れた。
……無人の廃墟に、日向子の足音が響く。
ふと、足元の感触に変化を感じて日向子は下を見た。
右足の下に破れた赤い絨毯が敷かれていた。
壁紙は剥がれ落ち、家具は朽ちている。
細かな埃が、窓から差し込む光を反射していた。
障害物をよけながら、日向子は階段の前まで進む。
そこで立ち止まり、踊り場を見上げた。
「…………」
目を細めて、暗闇の奥をじっと見つめた。
「……なにも聞こえないね……」
日向子がそう言ったきり、空間はしんと静まりかえっていた。
その空白に違和感を覚えて、日向子は手元を見下ろす。
「トトちゃん？」
画面内のトトは、呆然とした表情を浮かべている。
日向子の声と視線に気付き、トトははっと息をのみ、口を開く。
「あっ、はい！　どうしましたか、日向子さん」
「あ、なんというか、人の気配を感じないかな一なんて……。もしかして、私たちに気づいて隠れてるのかな……」

「……そう……かもしれませんね」
「？」
トトの様子に、日向子はもう一度、反対側に首をかしげた。
トトは相変わらず、どこか呆けたような表情。
かといってもう一度話しかけたところで何かが変わる様子はなく、日向子は階段を上り始めた。
「…………」
……階段を上がった先の廊下も、一階と同じように荒廃していた。
変わらない景色の廊下を、日向子はゆっくりと歩く。
突き当たり。見上げると、非常階段の表示パネルがあった。
「……誰もいないね」
タブレットを見下ろして、日向子は言った。
「どうしようか……？」
顔を上げてからそう言った日向子の声のあとに、また沈黙が生まれる。
日向子は手元に目を落とす。
トトがゆっくりと顔を上げて、日向子を見返した。
「帰りましょうか」
「へ？」
日向子は[illegible]

日向子はきょとんと目をあげて、首をかしげた。
「え、いいの？」
「はい。恐らく、ここにはいません」
「いない？」
「はい。帰りましょう、日向子さん」
「うん。まあトトちゃんがそう言うなら、そうしようか」
日向子は返事をしたあとも、しばらくトトの様子を眺めていた。
トトの表情は変わらない。
「……？」
日向子は振り返り、来た道を引き返す。
外はすでに、夕刻が近づいていた。
……外に出た日向子がもう一度、建物を見上げる。
入ったときと同じように廃墟が森の中心に建っている。
日向子の視線はまっすぐ、一箇所に注がれた。
上階の一部屋。割れて、くもった窓。
「………」
しばらくそうしたあとで、日向子は振り返り海岸へ続く山道を歩き始めたのだった。

「日向子さん、今日はお付き合い、ありがとうございました」
寮のロビー。画面の中で、ぺこりとトトが頭を下げる。
「いえいえ。トトちゃんとまたお出かけできて、楽しかったよ」
日向子がタブレットの画面を見つめて微笑んだ。
「あの、日向子さん」
「ん、なあに？」
トトは俯いて、自分の手の甲を眺めていた。
日向子は画面を見つめてトトの言葉を待つ。
「今日……私は、ももが普通の学園生活を送って研究から離れると、私との時間がなくなるといいました。でも……やっぱり、ももには幸せになってほしいです」
日向子は小さくうなずく。
「ももは、友達がほしかったんだと思います。これまで、周囲から天才ともてはやされて、ももはずっと孤独でした。海外に住んでた期間も長かったし、日本でも居場所を転々としていたももには、連絡を取り合うような友人がいません。だから……、これからも、ももと仲良くしてもらえたら、嬉しいです」
そこまで言い終えて、トトはぺこりと頭を下げた。

日向子が微笑んで、画面に優しく触れる。
「それは、私の台詞だよ。自慢じゃないですが、友達の少なさなら、私も負けてないからねっ」
トトは小さく口を開けたまま、日向子の言葉の意味を考えた。
「そうでしたね」
そのあとで、トトは笑いながら言った。
日向子も声を出して笑う。
「ももちゃんは大丈夫だよ、トトちゃん」
日向子は、トトをまっすぐに見つめた。
「ここは、そういう場所だから」

・・・

鍋から沸き立つ白い湯気が、換気扇に飲まれていく。
日向子は菜箸で鍋をかき混ぜながら、鍋の渦を眺めていた。
――トトとの冒険を終えて、夕飯時。
日向子はいまだルームメイトがいない自室で、夕飯の支度をしていた。

働いていたころから一人暮らしで、料理ができないというわけでもない。働いていたときは時間がなかったが、ここなら時間がたくさんある。それなら――というのが、日向子の考えだった。
箸を上げ、蓋を閉める。
「……………」
蓋の小さな穴から、勢いよく湯気が漏れ出ていた。
吹き出ては消える白い気体を眺めて、日向子がひとりごちる。
「みんな、色々な事情を抱えてるんだな……」
誰にともなく呟くと、鳴り響いてきたのはチャイムの音。
日向子は手元のＩＨのボタンを操作し加熱を止めてからインターホンに駆け寄った。
画面をのぞき込む。
「三国先生……？」
画面の向こうに、三国の姿が映る。
やり取りをするまでもなく、日向子が部屋の扉を開けた。
「悪いね、こんな時間に」
「あ、いえっ。……どうされましたか？」
三国は引いてきたキャリーカートを引き寄せて、積まれたダンボールを日向子のほうに向けた。
「[illegible]

「これはほんの一部だが、ミリャの私物だ。もしかしたらそろそろ動きがあるかもしれなくてね。とりあえず、適当に保管しておいてほしい」

「あ、わかりましたっ」

三国はダンボールを固定していたゴムバンドを解き、一箱ずつ玄関におろしていく。

――ミリャは少し、医療的な支援が必要な立場だ。

学園に正式に登校していないのもそれが理由。寮には枠はあるものの実際にはまだ済んでおらず、そのルームメイトとして相方が日向子、というのが現在の状況だった。

三国は今回の計画では保険医のような立場でもあるので、必然、ミリャの面倒を見ることにもなっている。

「中に運ぶか？」

「……えっ」

日向子が三国の左手の薬指の指輪に気を取られている間に、三国が首をかしげていた。

ワンテンポ遅れて反応を返す。

「あっ……あ――……」

振り返り、廊下の奥を見つめる。

「いいえ、ここにおいていただければ」

「そうか。ああ、あと」
体を起こした三国が、コートの内ポケットに手を入れる。
「これが、運ばれてくる荷物のリストなんだが――」
ポケットから取り出したのは、綺麗に畳まれた小さな紙。
ただその紙と一緒に、ポケットから二つ折りのカードケースが零れ落ちる。
「あっ」
カードケースは、開いた状態のままぽとりと床へ。
日向子がしゃがみこみ、それを拾おうと手を伸ばした。
手が届く前に、日向子は中の写真に気がついた。
「！」
透き通った髪色の若い女性と、よく似た髪色の少女。
日向子の動きが止まる。
黙ったまま、落ちたカードケースを見つめていると、三国の手が伸びてきてそれを拾った。
「あ……」
日向子がゆっくり立ち上がりながら、三国を見上げる。
三国は日向子と視線を合わせず、自然な動作でカードケースを元のポケットにしまった。

　そのあとで少し、日向子に微笑んだ。
「……すまないな」
「……へっ。あっ……すみません」
　日向子は思わず、ぺこりと頭を下げた。
　沈黙が二人の間に流れた。
　三国は黙ったまま、畳まれた紙を日向子に差し出した。
「これは、週明けに運ばれてくるミリャの荷物リストだ。時間がない中、手間をかける」
　日向子は両手で、その小さな紙を受けとった。
「それでは、失礼」
　三国は振り返り、小さく畳んだキャリーカートを抱えて部屋をあとにした。
　日向子がその背中を見送る。
　三国が見えなくなる前に、扉が閉まった。
「…………」
　日向子はしばらく動かずに、閉じた扉を眺めていた。
「ウソ……。あれって……」
　三国の落としたカードケース。
　映っていた女性は、どう見ても――
「ひゃっ!?」

思案に耽ろうとした矢先、ふたたびチャイムが鳴って日向子は飛び上がった。
何か伝え忘れたことでもあったのだろうか。そう考えてインターホンを確認しようと身を乗り出した瞬間、日向子の足がダンボールにぶつかった。
「あたっ。……うう」
涙目。けれど、誰かが助けてくれるわけでもなく。
うずくまり、足を引きずりながら、日向子は再びインターホンに手を掛ける。
「は、はいっ……あれ？」
映っていたのは予想外の人物。三国ではなく、そこには新田司が立っていた。
その半歩後ろにはミリャもいる。
「新田くんと……ミリャちゃん？」
日向子の声が少しうわずった。
「あ、箒木さん。えっと、ミリャちゃんとは途中で会って、連れてきたんだけど……。その、ご飯まだだったら、これから理人もあわせて四人で一緒にどうかな」
画面越しの司は歯切れ悪くそう言った。

「え？　あ、うん。それはもちろん是非っ」
そうこたえてから、キッチンを見やった。
ＩＨの上に鍋がおかれている。
「ええっと、あー、じゃあちょっとだけ、待っててもらえるかな」
「ああ、もちろん。ロビーでミリャちゃんと待ってるよ」
「ごめんね。すぐいくからっ」
日向子はインターホンのボタンを押して画面を消すと、鍋の加熱を止めて、急いで出掛ける準備を開始したのだった。

貴重品と文房具が入った小さな鞄を持って、日向子がロビーに向かう。
やや駆け足で廊下を抜けると、司とミリャの姿が見えた。
声を掛けようとしたところで、様子が変なことに気が付く。
司は左手で額をおさえていた。足元には、おそらく取り落としたのであろうパンフレット。
「くそ……」
司の手の平と額の間から、汗の雫が零れる。
表情も尋常なものではない。

表情[illegible]のではない

「新田くん、大丈夫？」
「！」
その声に、司がすばやく日向子を見上げる。
隣のミリャはどうやら眠ってしまっていたようで、日向子の声ではっと目を覚ました。
「えっと……」
日向子が落ちたパンフレットを拾い、司に差し出す。
司は頬に一筋の汗を垂らしたまま微笑んだ。
「ああ、ありがとう。いつもの眩暈がちょっとね……」
「大丈夫？」
「うん。一気に引いたみたい。それより、ミリャちゃんがさっきまで眠ってて。もう眠いのかもしれない」
「そっか……」
日向子はミリャのほうを向いて、頭に優しく手をおいた。
ミリャは日向子の手を受け入れて、心地よさそうに目を細める。
「ミリャちゃん、部屋で寝ようか」
「……（ふるふる）」
ミリャが首を振った。
「眠くないの？」

「……（こく）」
うなずく。
「じゃあ、ご飯食べる？」
「……（こくこく）」
ミリャが二度うなずいた。
司は、日向子とミリャへ交互に視線を投げながらやりとりを見守っていた。
「大丈夫みたい」
「そうみたいだね」
「新田くんも、本当に大丈夫？　無理ならまたの機会でも……」
「いや、ありがとう。こっちも大丈夫だよ。ほんと、大したことはないから」
「そう？　ならいいけど……」
不安そうな日向子に対して目を合わせて微笑んだあと、司はパンフレットのページをめくった。
それと同時に、申し訳なさそうに切り出す。
「箒木さん、申し訳ないんだけど……」
「ああ、うん。車だよね。大丈夫、そのつもりで出てきたから」
日向子は手元の鞄から車の鍵をとり、顔の横で振りながら言った。
「なんか、いつもごめんね」

なんか、いつもごめんね」

「ううん、もうこれは私のアイデンティティだと思ってるから！」

「あははは……。それじゃ、理人を拾って行こうか」

司は立ち上がってそう言った。

寮から車で十分ほどの場所にあるレストラン。

ボックス席に四人は座った。注文はすでに済ませ、あとは料理を待つばかりとなっている。

セルフの水を飲みながら、理人が口を開いた。

「そうだ司、適性検査どうだった？　再検査だったんでしょ？」

「う一ん、俺に必要なのは時間と環境で、可能性をせばめず、色々やってみたほうがいい、みたいなこと言われた……」

「ほええ」

「まさに今やってるじゃん」

「まあ、そういう意味では選択は間違ってないのかもしれないね」

司が苦笑する。

「なるほど。しかし、あのシステムはすごいよ」

「う一ん、なんか的を射てるというかね、本質をついてくるよね」

「そう。今回の適性検査もそうだし、補足として使われてるっていう、タブレットに内臓されている学習システムが本当にいい。似たようなアプローチの教育システムはベンチャー含めて色々あるけど、このはすごく洗練されてる。これは時代を変えるよ。さすが国が関わっているだけのことはあるよね」

　そう語る理人の顔を、ミリャはまっすぐ見つめていた。

　理人の隣の司が、無表情なミリャの顔を眺める。

「先生も散々タブレットを使うようにって言っていたもんね」

「うん。例えば資料としての機能をとれば、タブレットがもはや図書館そのものなんだよね。しかも、図書館の場合は何百冊もある本の中から目的と合う本を探さないといけない。それが全て一つにまとまっている上に、関連したワード検索もできる。そりゃ紙の本が廃れるわけだよ。もちろん、情報という観点においては、だけど」

「まあね。ある程度見当がついている内容ならともかく、どこから手を付ければ……みたいなときに、紙の本から情報を探すのは大変だしね」

「そう。だから、なにをするにもタブレットを使うのが一番効率がいいだろうね。司にはこのまえ、僕の私物の本を貸したけどさ、あれを読むより、タブレットで調べたほうが早いよ、たぶん。もちろんネットも含めてね」

「も含めてね」
「そうなんだ」
「私も、このシステムがあったら教育現場が大きく変わるんじゃないかなって思った。私たちが学生のころにあったらよかったのにね」
「実際、この計画にはデモンストレーションの意味も含まれてるんじゃないかな」
　理人はそういって、体を椅子の背もたれに預けた。
　ミリャの視線が、カウンター席の奥に向けられる。
　その視線の先から従業員が現れた。
　四人が頼だ料理を持って、まっすぐボックス席に向かってくる。
「お待たせしました。こちら、ルッコラサラダ、桜のピッツァとドラータになります」
「うわぁ、美味しそう――！」
「……（こくこく）」
　ミリャは二度うなずいた。
「ドラータのモッツァレラチーズはこの島で採れたもので、数が少なくとても貴重なんですよ」
　従業員はフォークとロールカッターを使ってピッツァを八等分した。
　ミリャの視線が、従業員の手元にまっすぐ注がれる。

「すごい、なんか贅沢だね……」
「週末くらいいいじゃないの。自炊じゃ作れるものも限られてるしね」
「作ってるの大体俺だけどね」
「まぁまぁ」
従業員はピッツァを切り終え、軽く頭を下げた。
「ごゆっくり」
それぞれが中央の大皿から、それぞれ1カットのピッツァをとる。
「いただきます」
司はドラータを頬張った。
「……。うわっ、うま」
「ふああ〜、幸せ〜」
日向子は揃えた指で口元を押さえながら言った。
ミリャは頬を丸くして、もくもくとピッツァを頬張る。
「これは格別だね」
各々が手元のピッツァに夢中になる中、理人が口を開く。
「そういえばさ、司がやたらミリャちゃんに懐かれてるのはどうしてなの」
日向子は傾けていたグラスを口から離した。
「それ、私も気になります

それ、私も気になります！」
冷たい水を飲み下してから、日向子が言った。
二人の視線を受けて、司が後頭部を指でかく。
「いや、そんなこと言われても」
司は視線をミリャに向ける。
ミリャの頬はピッツァで丸く膨らんでいた。
「俺が知りたいくらいというか……」
ミリャは司の視線に気付き、首を傾げる。
「？」
「なんだか、二人は行動が似てるよね」
「え、どんなところが？」
「えっとぉ……謎なところ、とか？」
「ああ、たしかにね。そういや最近やってないの？」
司は隣の理人に視線を向ける。
「なにを？」
理人は手元のグラスから水を一口飲んだ。
「え、幽霊探し」
「……」「…………」
司と日向子が黙ったまま、視線を合わせる。
日向子が司にだけ見えるように、小さく手を左右に振る。私は何も

言ってないよ、のポーズ。
　司は理人に、上半身ごと向き直った。
「え、どこ情報？」
「あー……」
　理人は天井を見上げて唸った。
　それから、中央の大皿に残った最後の一切れを取って、頬張った。
「ピッツァおいしいね！」
　司が足元で理人のふくらはぎを蹴る。
「イタイ！」
「で？」
「え、ガチで幽霊探しなの？」
「いや、そうじゃないけど……。なんかそういう噂がたってるとは聞いてたから」
「うーん。できれば僕が言ったということを内緒にしてほしいんだけど……まあ、ももちゃん先生ですね」
「やっぱり」
　司が日向子に向き直る。
「……やっぱり？」
　日向子は口元をおさえて、司から目を逸らした。
　[illegible]、自分の皿に残ったピッツァを口に運ぶ。

おもむろに、自分の皿に残っていたピッツァを口に運ぶ。

「ピッツァおいしいね！」

「…………」

司はため息をついて、背もたれに体を預けた。

「いやまあ、探し物はもう見つかったからいいんだけどね」

「えっ、そうなの？」

「うん」

司がグラスを手に取り、一口水を飲む。

グラスを机において、窓の外を眺める。

四人の姿が半透明に反射しているのを、司が見つめた。

理人と日向子が、司の言葉を待つ。

「幽霊では、なかったけどね」

呟くように、司は言った。

「まだやっていたのか」

職員室。夜遅くまで仕事をしていた伊砂のもとに、三国がふらりと現れた。

「まあ……やることは山積みですから」

伊砂はディスプレイから視線をそらさずに言った。

三国は黙ってその姿を見下ろす。

少しの間そうしたあとで、手にさげたビニール袋から缶コーヒーを取り出し、伊砂のデスクにおいた。

「少しは休んだらどうだ」

キーボードを叩く手を止めて、伊砂が缶コーヒーを見る。

そして、三国を見上げた。

「カフェイン入りの珈琲を渡しておいて？」

「……」

「ありがたくいただきます」

伊砂は少し笑って、缶コーヒーのプルタブを引いた。

口に運んだコーヒーを一口飲んで、小さく一息つく。

「……アルファは、見つかりましたか？」
「警戒されている限り、見つけるのは難しい」
「でしょうね」
伊砂はもう一度缶コーヒーを口に運び、反対の手でエンターキーを叩いた。
「この問題もあまり長くは隠せません。今のうちに対応が必要なんです」
「……手伝えることはあるか」
伊砂は三国を見上げた。
「むしろ、私があなたを手伝うことができませんので。あなたは、あなたの役目を」
「そうだな」
伊砂はうなずいて、視線をディスプレイに戻した。
三国が窓際まで歩き、外の景色を眺める。
桜の花びらが舞っていた。
灰色のコートの内ポケットに手を入れ、カードケースを取り出す。
そこに描かれているのは、三国にとってかけがえのない二人の女性。
「…………」

しばらく眺めてからカードケースを閉じ、再び三国は外を眺める。
夜だというのに、外では変わらず桜の花びらが舞っていた。

・
・
・

「……学園七不思議？」
自分の席で開いたノートに集中していた司は、声をかけられて顔を上げた。
にんまりと笑みを浮かべる中村夏奈が司を見下ろしていている。
「そう！　新田くん、幽霊探しの専門家なんだよね!?」
大きな声で夏奈が言った。
周囲の席の生徒が何人か、司のほうを振り返る。
司はその視線に気付き、一瞬目を泳がせた。
「それって、どこ情報？」
司がもう一度、夏奈を見上げて言った。
「わかんないから聞いた！」
「…………」
二人に釘付けになっている生徒が増えているのを、司は感じた。

二ノに釘付けになっている生徒が増えているのを、司は感じた。
小さくため息をついて、司が立ち上がる。
「……中村さん、とりあえず場所を変えようか」
向かった先は教室の外、人気のない階段の踊り場。
夏奈は手を後ろに組んで、司についてきた。
「私こういう告白のシチュエーション、憧れてたんだ」
「……違うよ？」
目を輝かせている夏奈に見つめられて、司は後頭部をかいてため息をついた。
「幽霊、だっけ。悪いけど、俺も全然知らないよ」
「じゃあ、新田くんを学園七不思議の一つにしていい？」
「じゃあって……」
今度は司が首をかしげる。
「そもそも、なんで俺？」
「クラスで集計した不思議ちゃんアンケート第一位だったから！」
司はこめかみを押さえて宙を仰いだ。
「まじか……絶対中村さんが一位だと思ってたのに」
しばらくそうしてから、目の前の夏奈を見下ろす。
手に持っているノートが司の目についた。
「というか、学園七不思議をまとめたものを課題として提出するつも

りなんだよね。それって許可降りたの？」
「よく考えてくださいって言われた」
司が夏奈の笑みを正面から見下ろす。
「……それで、どうしたの？」
「よく考えた」
「……。……まあ、いいか。ちなみに、他にはどんなネタが上がってるの？」
「教えたら、教えてくれる!?」
「まあ、逃げられそうにないし」
「はい！」
夏奈が元気よくノートを差し出す。
司が受け取って中を開くと、罫線の存在を無視した大きな文字がページいっぱいに躍っていた。
それなりに、調査自体はちゃんとしているようだ。
「……ああ、立ち入り禁止地区ね。それっぽい」
ぱっと開いたページに書いてあったのは、この島の「立ち入り禁止地区」について。
トライメント計画の参加者は少なからず島での移動が制限されており、ここ第一地区の生徒は「第二地区」にいまのところ行けないようになっている。これは学園のプログラムの二つの理由によるもので、今後開放さ

になっていた。学園のプログラム」の理由によるもので、今後開放されると聞かされている。
　もちろん、夏奈のノートにはそんなまっとうな理由ではなく、あることないことがつらつらと書かれてはいた。
　……ページを捲る。
「ん？」
　ある一文が、司の目に止まった。
『学園を彷徨う謎の女の子』
　司は、その文字をじっと見つめる。
　司が動きを止めたことに気づき、夏奈も開かれたノートを覗き込む。
「道端の野草を食べるらしいよ！　ここの生徒じゃないって話題になってるんだけど、新田くんなにか知ってる!?」
　ペンと紙を持った夏奈が、わくわくと司を見上げる。
「ああ、いや……」
　ぐいぐいと詰め寄ってくる夏奈から身を引くように、司がのけぞる。
　もう一度、手元のノートに視線を落とす。
　道草の野草を食べる。神出鬼没。話しかけても応答はなく、どこかふらふらとした雰囲気を漂わせている少女の噂。

「だから、司は正面から夏奈を見据えて、呟くように告げた。
「――この子は、普通の女の子だよ」

本校舎と図書館の間にある中庭に、桜が咲いていた。
風に吹かれ散って舞う花びらが、テーブル席で談笑する女生徒たちにふりそそぐ。
……日向子は中庭を通り、図書館へ向かっていた。
その途中。日向子がテーブル席を通ったとき、二人組の女生徒の会話が耳に入る。
「ねぇ、あの子って噂の――」
びくり、と日向子の体が跳ねる。
声のした方に、ゆっくりと視線を向ける。
二人組の女生徒の視線は、日向子のいる場所と別のほうへ向けられていた。
「……はあ」
それを確認して、日向子は胸をなで下ろしながら小さく息を吐く。
そして、あらためて二人組の視線の先に目を向けた。
「う

「あっ」
道端にしゃがみ込み、野草を手でむしっている小柄な少女がいた。見覚えのある後姿。薄い色の短い髪の毛が、ぴょこぴょこと跳ねている。
「あわわわ……」
ヒソヒソとささやき合うテーブル席を、日向子が横目で盗み見る。そのあと視線をしゃがみ込んだ少女の背中に戻して、そろりそろりと近づいていった。
「ぉーぃ、ミリャちゃーん……」
日向子は静かに声をかけた。
少女は日向子の声には気づかず、むしりとった野草を口に運ぶ。
「ちょっ」
日向子が駆け寄って、野草を奪う。
「もーっ、また食べようとしたでしょっ？　道端に生えたものは食べちゃダメって言ったのに」
ミリャはしゃがみ込んだまま振り返り、日向子を見上げた。
しばし、日向子と見つめ合う。
立ち上がって日向子に向き直ると、ミリャはもう片方の手に持った野草を日向子に差し出した。
「……」

「え、くれるの？」
日向子は、差し出された野草を見ながら言った。
「……（こく）」
ミリャは黙ってうなずいた。
日向子がその野草を受け取る。
自分の手にある野草を眺め、はっとしてまたミリャの顔を見やる。
「じゃなくって！　ミリャちゃん、また勝手に抜け出しちゃったの？」
「？」
その態度に、日向子が小さくため息をついた。
振り返り、テーブル席に顔を向ける。
二人組の女生徒と目が合う。
一息の間をおいて、互いに苦笑いを浮かべて会釈した。
日向子がミリャに向き直る。
「ミリャちゃん、こっち」
ミリャの手を引きながら、日向子は歩き出した。

日向子が向かった先は、職員室だった。
「いつもすまないね」
応対した三国は、心底申し訳なさそうな表情を日向子へと向ける。
日向子の隣に立っているミリャは、我関せずとばかりに窓の外の景色を眺めていた。
「いえ。最近噂になっていたので、一応連れてきた方がよいかと思いまして……」
「噂？」
「はい。私服で学内を徘徊しているので、少し目立っているみたいです……」
「そうか……」
三国が顎に手を当てて思案する。
「頃合いとしてはちょうどよかったのかもしれないな」
「というと？」
「以前、ミリャがクラスへ復帰すると伝えていたが、今週明けに決まった。箒木のルームメイトとして寮での共生も始まることになる」
「えっ。本当ですか!?」
「毎度急な話で申し訳ないね」
「い、いえっ！」
日向子の声色は明るい。彼女は少なからず、司居人がいないことを

寂しがっていた節がある。
楽しげな様子を見て、三国は微笑んだ。
「詳細はのちに箒木のタブレットに送られる。手間をかけるが、週末は準備を頼む」
「わかりました！」
日向子はぺこりと頭を下げ、ミリャに小さく手を振ってからその場をあとにした。
……立ち去る日向子の後ろ姿を、ミリャと三国が見送る。
日向子が廊下の角を曲がったところで三国は息をつき、反対側の職員室に歩き出した。
「ミリャ？」
数歩歩いてから、三国はミリャが隣を歩いていないことに気がついた。
振り向くとミリャは、三国とは反対側に歩き出していた。
「どうした？」
ミリャを目で追いながら、声をかける。
ミリャは立ち止まって三国を振り返り、北を指さした。
それは職員室でもなく、また日向子が帰っていった先でもない方角だ。

「…………」
三国はその様子をじっと見つめた。
そしてミリャに視線を戻して、頷いた。
「ああ、行ってくるといい」
ミリャもそれにうなずき返してから、ぴょこぴょこと廊下を駆けていった。
「……」
「いいんですか？　あれで」
ミリャの姿が消えたところで、一部始終を見ていた伊砂が三国に声を掛ける。
気づいていたのか、三国に驚く様子はない。
「あれがデータの、一番いい収集方法なんだ」
「……そうですか」
伊砂の表情はいつもながら、あるいはいつも以上にどこか硬い。
気にした風もなく、三国はそのまま廊下へと足を向ける。
「私は新田に再検査についての話をしてくる。すでに結果は伝えているから、まあ、そうはかからないだろう」
「はい、よろしくお願いします」
「では」

可能性をせばめず、色々やってみたほうがいい。
　司の再検査の結果、出てきた内容がそんな文言だったのは、すでに結果通知で伝えていた。
　なので今日はその具体的な確認。といっても内容があいまいなだけに、いくつか確認事項を済ませただけで三国の用事は終了となった。
　職員室近くの空き教室。話を終えた三国が、立ち上がる。
「それでは私は職員室に戻る。わからないことがあれば尋ねに来るといい」
　そう言って、三国が教室の出口に向かおうとしたところで、司が声をあげた。
「あ、あの」
「どうした？」
「えっと、この件とは関係のない質問なのですが、いいですか？」
　三国が司のほうに向き直る。
「ああ、かまわないよ」
「ミリャさんのことなんですが」
「ミリャ？」

「はい。箒木さんのルームメイトの子と聞いています」
三国は黙って、言葉の続きを待った。
「実はミリャさんと……、えっと……遭遇することが多くて、ですね。その度、箒木さんを探して対応をお願いしていたのですが、正式にはまだ部屋には住んでいないと聞いて。そういう場合は、どう対応するのがいいのかなと、思いまして」
「ふむ……」
三国が小さく唸る。
少し考えてから、司を見て口を開いた。
「そうだな。そういうことであれば、新田にも知っておいてほしいことがある」
「？」
「ミリャについて、新田はどこまで知っている？」
「いえ、ほとんど何も知りません。恐らく、話すことができないんじゃないか……ということくらいしか」
「そうか」
三国は頷いた。
「新田の想像する通り、ミリャは発話に少し不便がある。脳の病気が原因だが、現在はあれでも顕著な快復を遂げているんだ。以前は起き上がることすらままならない状態だった。このまま日常生活へと復帰

していくことが、一番の快復方法だとされている」
司は口を閉じて三国の言葉を聞いていた。
三国は窓の外に視線を向けて、そのまま説明を続ける。
「現状は話すことも出来ないが、医学的側面からみると、問題となっている脳の電気信号は、外界から刺激を受けることで最適化していくはずだ。つまり、彼女にとっては、他の者と分け隔てなく、普通に接してやることが最も理想であると言える。危険な行動や状況を確認したら私に連絡を入れてほしいが、それ以外は自由にさせてやりたい。逆に言えば、それだけの判断力を彼女は持っている」
三国は視線を司に戻した。
司はまっすぐ三国の顔を見つめていた。
「ちょうど、ミリャは今週明けから学園へ通学する運びとなっている。それと同時に箒木との生活も始まるだろう。初日からの入学となると、周囲がコミュニティ形成に活発な時期と被る。それでは孤立してしまう可能性が高いとして、こういった方法を取っている。できれば新田も、可能な範囲で彼女の助けになってもらえると嬉しい」
司は三国の言葉を聞いて、ゆっくりうなずいた。
「……わかりました。色々お話いただき、ありがとうございます」
素直な返答に、三国は口を閉じ、目を細めて、司の顔を眺めた。

思わず口から感想が漏れる。
「……二上には似てないな」
「え？」
「いや、なんでもない。他にはないか？」
「はい、大丈夫です」
「そうか。また何かあれば、聞いてくれ」
「ありがとうございました」
司は座ったまま、三国に頭を下げる。
司にも寮へと戻るよう告げて、三国は空き教室をあとにした。

・・・

人のいない時間帯を見計らって、ひとり、司はバスでその場所へと降り立った。
バスにも乗り合わせ客はおらず、バス停に一人佇む。
エンジンがうなり、バスは道路の向こうへと消えていった。
「……さて」
肩にかけた鞄をかけなおす。

目的地は決まっている。まわりに誰もいないことを確認し、足を踏み出そうとしたところで、くい、と袖が何かに引っかかった。

「ん？」

視線を下ろす。

ミリャが司の袖をつかんでいた。

「わっ」

司が驚いて、身を引く。

「……ミリャちゃん？」

「……（こくり）」

「いや、領かれてもなあ」

司はため息をついた。

「バス、乗ってなかったよね？　こんなところで何してたの、帰れなくなった？」

「……（ふるふる）」

相も変わらず、ミリャが言葉なく首を振る。

司はぽりぽりと頬をかいた。

「俺、これから行くところがあって。その、ごめんね」

いつもなら日向子の元まで送り届けている司も、今回ばかりはそういうわけにはいかなかった。

明らかに後ろ髪をひかれるような表情で、ミリャを振り切ろうと歩き出す。

ミリャは、その背中を見つめて立ち尽くしていた。

「……」

司は海岸沿いを東側へと歩いていた。

見渡す限りの水平線。それを横目にしばらく歩いたところで、司があることに気が付く。

自分の足音に、異質な足音が重なっていた。

「……」

立ち止まってみる。

重なっていた音も、少し遅れて止まった。

……振り返る。

先ほど振り切ったはずの、ミリャの姿がそこにはあった。

「…………」

「…………」

沈黙したまま、二人が目を合わせる。

「まあ」

……はぁ」
司は再び、東を向く。
目をつむり、大きく深呼吸する。
そして、一気に走り出した。
「……！」
予備動作なし、完全に虚を突いたはずの急加速。
振り向くこともなく、コンクリートを踏みしめて全力で司が走っていく。
近づいてくる海岸の末端。
ようやくというところで司が確認のため振り返ると、音もなく、司の後ろにぴったりくっついて走るミリャと目が合った。
「うわっ!?」
司は前を向き、腕をさらに振り上げる。
「嘘でしょ……!?」
司はさらにスピードを上げた。
「はぁ、はぁ……っ、はぁ……ふぅ……」
「……」

島の中央にそびえ立つ山の麓に差し掛かった辺りで、司は膝に両手をついて立ち止まった。
「ふっ……っう……、はっ、はぁ……」
「…………」
汗を垂らしながら息を切らす司を、ミリャは無表情のまま見下ろしている。
司とて、そこまで足が遅いわけではない。だというのに、あまりに圧倒的な差があった。
「……これは確かに、七不思議に、入れられる、訳だ……」
息も絶え絶え。観念した司は、自販機でミネラルウォーターを買って休憩することにした。
自分のを取った後、ふたたび硬貨を入れて、ミリャにその場所を譲る。
「ミリャちゃん、好きなの選んでいいよ」
「……」
ミリャの視線が、並んだ飲料を順番に通り過ぎる。
視線は林檎ジュースの前で止まり、ミリャは黙ったままボタンを押した。
再びがたんと乱暴な音がして、自販機は林檎ジュースのアルミ缶を吐き出した。

吐き出した。

「林檎ジュース、好きなんだ？」

「……」

　質問に、特に返答はない。

　好きだから選んだのか、あるいはたまたまだったのか、よく分からない表情。

　林檎ジュースをミリャが手にしたところで、司がはあ、と息を吐く。

「ミリャちゃん、あのね、さっきも言ったけど、俺はこれから行くところがあるんだ。悪いんだけど、そのジュースで手打ちってことにしてくれないかな」

「……」

「帰れないわけじゃないんだよね？」

「……（こくり）」

「うん。じゃあ、また今度遊ぼうね」

　言い切って、司が今度こそミリャを置いてその場を後にする。

　最後に司が振り返ったときには、ミリャは自販機の前で林檎ジュースを抱えたままで、追いかけてくる様子は特に感じられなかった。

舗装された道を離れ、司は森林に足を踏み入れた。
海岸通りのすぐそばに生い茂った森林と、そこに刻まれた獣道。
人の手が入っていない道を、司は進んでいく。
……司はこの道を、つい先日も通っていた。
日課のランニングをしているうちに、偶然たどり着いた場所。記憶を頼に、その道順を辿っていく。
木々の合間を抜けていくと、やがて目の前に現れるのは大きな大きな廃墟の姿。
病院か、あるいはホテルか。崩れかけた鉄筋コンクリート、ツタがあちこちに生い茂った建物。
それが、司の目的地だった。
「……さて」
おじゃまします、と小さく呟いて、司がすでに用を為していない扉をくぐる。
建物の中には、日光が淡く差し込んでいた。
「やっぱり、病院だったのかな……」
明らかな医療器具は残っていないが、なんとなく、構造や残されたものがそんなことを思い起こさせる。
廊下を進み、階段へ。足音が廃墟の中に反響する。

廊下を進み、階段へ。足音が廃墟の中に反響する。

「たしか、次はこっちに……」

階段の先には長い廊下が続いていた。司はまっすぐ進んでいく。

突き当たりを曲がり、建物の中央方向へ。そのまま反対側に出て、とある扉の前で立ち止まった。

廃墟の扉。あたかも中に人がいるかのように、司がそれをノックする。

「……入るよ」

そう告げて、ドアノブに手をかけ、司は扉を開いた。

――陽光が差し込む部屋。淀んでいた空気が、光に照らされちらちらと舞う。

埃をかぶったベッドにソファ、ヒビが入ったテレビ。風化しきっている部屋の中で、漆黒のグランドピアノだけが陽の光をきらきらと反射している。

前に来た時と、寸分たがわぬその情景。

部屋の中央には、白い少女が一人立っていた。

「……アイ」

司が少女の名を呼ぶ。

アイ。

それが、その少女の名だった。

白い髪に、白を基調とした服装。髪は肩くらいの長さで、余った髪を頭の横で結んでまとめている。廃墟という場所はともかく、その快活そうな表情は「幽霊」という言葉とは似ても似つかない。
司に名前を呼ばれたアイは、朗らかに笑った。
「司、こんにちは」
「……よかった、いなかったらどうしようかと」
――司とアイの関係は、少々複雑だ。
日課であるランニング中に、偶然この場所を見つけた司は、先日も同じくこの場所でアイと出会った。
不思議だったのは、アイは司を知っていて、司は彼女を知らなかったこと。そして司は知らないながらも、彼女のことがどこか気になっていること。
前回は状況を確認し、再会を約束したところで終わっていたのだ。
「まさか司の方から来てくれるなんて」
「いや、こちらこそごめん。なんか、勝手に出張ってきちゃって」
「そんなこと。でも、今日はお友達と一緒なんだね？」
「え？」
そこで、司はアイが自分の背後に視線をやっていることに気付く。
振り向くと、ミリャが不思議そうに司のことを見上げていた。
「

「にに……マシカ」
司が珍しく困ったように溜息を吐く。
ミリャは気にせず、買ってもらった林檎ジュースをくるくると回したのだった。

色褪せたソファに、司とミリャは並んで座った。
二人に向き合うように、アイは木箱に腰かける。
「改めて、ごめんね、司。次はボクから会いに行くって言ったのに。内心嬉しくはあるけど、司の時間を奪ってしまうのは本意ではないからね」
「……というと？」
司が首をかしげる。
対して、アイは身を乗り出すようにして、上目遣いに司をのぞきこんだ。
「君はあの計画の参加者だからさ。ボクみたいな部外者に時間を割く暇はないんじゃないかな？」
「それは……気にしすぎだよ」
司は苦笑いを浮かべ、アイは微笑む。

ミリャは無表情のままだった。

「ふふっ、ごめん、いじわるして。タイミングが見つからなかっただけでボクから会いに行こうと思っていたし、司からたずねてきてくれたのは素直に嬉しいんだ」

そこで言葉を切り、アイがゆっくりと視線をミリャに移す。

「まあ、今日は女の子がご一緒みたいだけど？」

にやりと笑って司に目を向けるアイから、司が顔を背ける。

床の一点を見つめてぽりぽりと後頭部をかいてから、アイに向き直った。

「……その、紹介するよ。彼女はミリャ。苗字は……そう言えば、聞いたことなかった」

「ミリャ・ブランコさん。そうだよね、ミリャ？」

アイがミリャを見つめる。

ミリャもアイを見つめた。

「……（こくっ）」

ミリャが頷いて返す。

呆気にとられたのは司だ。

「驚いた……。二人は、知り合いだったの？」

「ちょっとね」

――司に知らないか、アイとミリャに面識があるのに、実は日向子が関係していた。
あの日は今日の司とミリャとは逆に、ミリャが先行してそれを日向子が慌てて追いかける、という形で、日向子とミリャはこの場所にたどり着いたのだ。
必然、アイは日向子とも面識がある、ということになる。
「じゃあミリャ、ここの場所は知ってたのか……。まあそれはともかく、ここにきたのはさ、前は途中で話が途切れちゃったというのもあるんだけど、純粋幽霊の噂が気になって」
アイが首をかしげ、きょとんと目を丸くする。
「幽霊？」
「うん。まあ、オカルト好きな人たちの話だから、それはいいんだけど……」
司はそこで言葉を切った。
幽霊、か。アイが小さく呟く。
ミリャは無表情のままで黙っていた。
「前に……俺たちが別れたときのこともあって、再確認にきたというか」
「それって、ボクがオバケかどうかってことだよね」
「まあ、うん。そうなるね」

「ふ一ん、なるほどね」
島のはずれの廃墟には、幽霊が住んでいる。その噂は、図書館にあった郷土資料が元ネタだ。司はそれに従ってふらふらとしていて、今度は司自身が学園七不思議になってしまった――司にまつわる噂の事情はそんなところだ。
　アイは、ぶらぶらと遊ばせていた足を床にしっかりつけて立ち上がった。
「じゃあ確認してみる？　ほら、触ってもいいよ」
　アイがいたずらっぽく笑って、司に向かって手を広げる。
「いや、いいよ。うん、こうして会えたし、幽霊じゃないよ、君は」
「透けるかもよ？」
「いやいや」
「もう」
「うわっ」
　アイが司の手をとり、引っ張る。
　そのまま握った手を一度優しく離し、そのあとで互いの指が絡み合うように手を重ねた。
「……っ」
　司の頬がわかりやすく赤らむ。

視線は繋がれた手に注がれている。
少し顔を上げると、微笑んで見上げているアイと目が合った。
「ほらね？」
「……そうだね」
「……」
「……ええと、分かったから、離してくれると助かる」
「あはは、分かってくれればいいよ」
顔が赤い司に対し、アイが微笑みながらぱっと手を離す。
二人はそろって、再び椅子に腰を落とした。
「でも、司がここへ訪ねてきた本当の理由は、ボクが幽霊かどうかを確かめるためじゃないよね」
「…………」
司は答えない。
あるいは、沈黙自体が肯定か。けれどもそれを分かっていながら、アイは首を横に振る。
「でもごめん。ボクは、君の疑問に答えることはできない」
「……どうして？」
「きっと、君自身がそれを望んでいないから」
「望んでいない？」
「うん。きっとね」

「……」
司が目を細める。
そして下を向き、両手に力を込めた。
「じゃあ」
口を開き、顔を上げる。
俯いたままのアイの白い髪が、風になびいている。
「君は……。アイは、一体何者なの？」
アイは顔をあげて、司の視線を正面から受け止める。
そして、僅かに顔を逸らしてミリャを見た。
ミリャもアイを見つめている。
司と目を合わせてから、アイがゆっくり口を開く。
「前にも言ったとおり、ボクは廃墟暮らしの、ただのホームレス。司にとっては、ちょっとだけお姉さん、になるのかな」
司は小さく息を吐き、目を伏せる。
「あっ、ちゃんとシャワーは毎日浴びてるからね？」
取り繕うように、アイが言った。
その軽口に、司が少しだけぽかんとした後、思わず笑う。
「……ま、いいか」
つぶやくように、司が言った。

「まったく。廃墟暮らしの女の子が、ただのホームレスなわけないと思うんだけどね」
「あはは。ダメかな？」
「いいと思うよ。ミステリアスで」
「えへへ」
照れたように笑うアイ。
そんな様子をしばらく見つめた後、けれども再び司の表情が自然と消えていく。
「君のような女の子が知り合いにいたのであれば、忘れることなんてなさそうなのにね」
――司はアイを、覚えていない。
その事実に、アイの表情が少し曇る。
「いいんだよ、司はそれで。今の君はすごく楽しそうにしているから、ボクも嬉しい」
「……アイは、俺が覚えていないこと、どう思ってるの？」
「それは、寂しかったけど……ボクにとっては、それでも司が司であることに変わりはないから、いいんじゃないかなって」
言いながら、アイがミリャに視線を移す。
ミリャはずっと、アイの目を見つめていた。
「ボクが司を覚えている。だから司の思い出は、ゼロじゃない。これ

からは……新しい思い出をまた、作っていけばいいんだよ」
司は顔を上げ、焦点の定まらない目でこの部屋の空間を眺めた。
「……うん……」
小さくこたえた司の視線が、グランドピアノの上で止まる。
「ねえ、アイ」
「うん？」
「……」
司がぼんやりとピアノを眺め続けた。
アイが首をかしげる。
「……アイは、ピアノを弾ける？」
「ピアノ……？」
不意を突かれたように、アイが聞き返した。
それから司の視線を追うように、隣におかれたグランドピアノを見る。
「ああ、ボクは弾けないよ。これは部屋の飾りだね」
「そっか」
アイの答えを聞いた司が顔を伏せる。
「ありがとう」
感謝の言葉は、しかし決してアイの顔を見ることはなく。

「……？　どういたしまして」
首をかしげながら、アイは答えたのだった。

建物の外に出て数歩進み、司が振り返る。
隣を歩くミリャも、司の視線を追いかけて廃墟を見上げた。
しばらく廃墟を見たあと、司はミリャを見下ろした。
二人の視線が交わる。
「ミリャちゃん、アイとは昔からの付き合いなの？」
「……（ふるふる）」
ミリャは司の目を見つめたまま首を横に振った。
「ん、じゃあ、ここにきて知り合ったの？」
「……（こく）」
今度は、縦に一度。黙ったままでうなずいた。
「まあ、ミリャちゃんならありえそうだね……」
いつもふらふらとしていて、こんな海岸までひとりで来るくらいだからさもありなん。司はひとり納得し、呆れたように小さく笑った。
そうして、司は廃墟に背を向ける。
「じゃ、帰ろうか」

[illegible]

ミリャはうなずいて、司の横に並んで歩き出したのだった。

・
・
・

「ゲーム内のキャラクターの挙動や、ゲームの流れを制御するためのロジックは基本的にはプログラマが全て記述しなければなりません。そのために必要となるものがプログラミング言語です。言語は基本的に何を選択しても問題ありませんが、ある程度のトレンドはあります。かつてコンピューターの処理速度が著しく遅かった時期においては、処理速度を優先させるべくアセンブリ言語が主流でしたが――」

司は自室の机に向かい、タブレットの画面に集中していた。

いわゆるEラーニングと呼ばれる、学習用の動画。動画の解説者は関連画像やグラフを使い、抑揚なく話し続けていた。

「早速やってるね」

タオルを首に掛けた理人が部屋の中に入ってきた。

司は動画を一時停止させ、理人のほうを振り返る。

「とりあえず、概要の理解をと思ったんだけど……これ、俺にできる

ことあるかな？」
　理人は首にかけたタオルをとって洗濯カゴに放り込んだ。
「もちろん。司が協力してくれるなら、ゲームのテストプレイと、そのフィードバックを主にお願いしたい」
「ふむ」
「実際にゲームがテストできるまで時間がかかるから、司はその間に基本的知識を勉強してもらえれば助かる。もちろんそれには僕も協力する。最終的に課題のレポート提出やプレゼンがあるから、司にはそこで初心者の視点から開発の過程で感じたことなんかをまとめて発表してもらいたいんだ」
「なんか、二人の負担が大きいというか、俺、おんぶに抱っこって感じがするけど……」
「そこはまぁ、司さえ良ければ、僕が好きでやってることだから気にしないでほしいかな。むしろ僕が二人を巻き込んだ形だからね。僕が得をすることはあっても、迷惑になることはない」
　理人は机にノートをひろげ、ページを繰りながらそう言った。
「理人とももちゃんはどうするの？」
「僕らは主に、技術的側面からの発表を考えている」
　手元のノートに視線を落としたまま、理人は答えた。
「これまで僕らが行ってきた開発作業の中で、ＡＩが肩代わりできる

これまで僕らが行ってきた開発作業の中で、AIが肩代わりできそ
部分をひたすら探していくんだ。この検証結果をメインに発表する。社会的にも有用性の高いテストだから、うまくいけば卒業後にも活用できる研究になる」

「なるほど……色々考えてるんだな」

理人はノートを閉じると、それを司のほうに差し出した。

司は理人の顔を見てから、ノートを受け取る。

「これは？」

「司用の勉強方法をまとめたノート」

司が目を丸くして、理人を見つめる。

「……理人が、まとめてくれたの？」

理人がうなずく。

司はノートをぱらぱらとめくって、軽く目を通した。

そのあとで理人の顔をまじまじと眺める。

「……どうしてここまで？」

「効率厨と言われるかもしれないけど。まぁ、誘った側だしね。それに、これを作ることで僕も勉強になるし、案外好きなんだよ、こういうの作るの。とまぁ、ここまでしておいてなんだけど、もちろん司の気が向いたらでいいから、考えておいてもらえると」

「……いや。俺、自由学習コースにするよ。この企画に参加させてほ

しい」

「……いいのかい？」

「うん。なんだか楽しそうだしね」

司の言葉を聞いて、理人が微笑む。

「わかった。よろしく頼むよ、司」

理人は手をあげて言った。

「こちらこそよろしく、理人」

司がその手に自分の手を重ねるようにして叩いた。

乾いた音が部屋に響いた。

翌朝。

うっすらと、司の意識が目覚めていく。

まだはっきりとしない意識の中、こんこん、と何かを叩くような硬い音。

次第に視界が鮮明になり、司がゆっくりと体を起こす。

「ん……」

そこに重なるように、さっきの音がこんこんと、また二回。

司はしわを寄せた眉間をおさえて、俯いたまま静止する。

司はしわを寄せた眉間をおさえて、仰いだまま静止する。
何の音だろう――そう考える間もなく、部屋の扉がガチャリと開いた。
「理人……？」
身を起こし、二段ベッドの上段をのぞく。
理人は口を大きく開けて寝息を立てていた。
「あれ……」
司がフラフラと部屋の入り口に向かう。
ああそうだ、さっきのはノックの音か――そう、気づいたところで。
「え」
部屋の先。そこには、アイが立っていた。
あの廃墟とは違い、いまは制服の上にパーカーを着ている。
「やほ」
そう言ってアイが手を上げる。
「ちょちょちょちょちょっと」
司は声を潜めて言い、理人が寝ていることをもう一度確認してから
アイに駆け寄った。
「なに、なんでいるの？？」
「えへ、きちゃった」

ぺろっと舌を出して、アイは言った。
「これ、一度言ってみたかったんだー」
「いやいやいやいや」
司が手と首をぶんぶんと振る。
「それ、私服じゃないよね？」
「もうっ、せっかく着てきたのに、第一声がそれですかっ」
「いやごめん、それどころじゃなくって」
司がちらりと部屋を振り返った。
理人の微かな寝息が聞こえくる。
小さくうなずいて、アイに向き直る。
「とりあえず、場所を変えよう、アイ。着替えてくるから、ちょっと待ってて……！」
廊下の壁に身をぴたりとつけたまま、司は廊下の曲がり角をのぞきこんだ。
その背後を、アイがのんびり歩く。
廊下には誰もいなかった。
「こん[illegible]

「よし、いこうっ」
うしろを振り返らず、司が足早に向かう。
「大げさだなあ」
ロビーに差し掛かったところで司は再び壁に身を寄せ、顔だけを出して前方をのぞきこんだ。
そして、勢いよく後方を振り返る。
「人が来る！」
「！」
司の言葉に、アイはあたりを見渡してから柱に駆け寄って身を隠した。
背中でそれを隠すように、司が相手に対峙する。
「やあ、おはよう」
「んあ？　おはよう」
ビニールを持ってロビーを横切ったのは同じく計画の参加者でこの寮に住む、五十嵐だった。
司の様子を訝ることなく、挨拶だけを交わしそのまま去っていく。
柱の後ろに隠れたアイが、五十嵐の背中を不安げに見送った。
「こっちへ」
「う、うん」
まだ朝も早く、人はそれほど見られない。

そろそろと移動し、司とアイは連れ立って、ほどなくロビーの玄関に辿り着いた。
外から、強い日差しが差し込んでいた。
「やった、ゴール……！」
目を薄めて、太陽を見上げる。
逆光。外に出ようと一歩踏み出そうとした司の前に、唐突に人影が現れた。
「!?」
司の目が次第に朝陽の強さに順応し、暗かった影が像を結んでいく。
釣り竿とクーラーボックスをもった夏奈が、司の目の前に立っていた。
「……」
夏奈はにんまりと笑って、司を見上げる。
「………………。おはよう、中村さん」
「おはよう、新田くん」
司の頬を、一筋の汗が流れる。
「大漁だった」
そう言われてからはじめて、司は夏奈の格好に気がついた。
「ら、らら、ま、まさか、朝まで釣りしてたの

「あ、ああ。また、朝まで錬りしてたの？」
「ウン」
「へえ、すごいね。それじゃ、ゆっくり休んでね」
軽く手を挙げてそう言い、司が夏奈の横を通り過ぎた。
すかさず、夏奈が司の前に踊り出る。
夏奈は表情を変えず、まだにんまりと司を見上げている。
「……なにかな？」
夏奈は無言で司を見上げる。
司は右に一歩ずれる。
夏奈もそれにならう。
司はため息をついた。
「どうして私の邪魔をするの」
「え？」
「私、右に行くから、新田くん、左ね」
「え？　うん」
司が左へ一歩移動した。
向かい合った夏奈は、自分の右手側に一歩移動した。
ダンスのステップのように、二人の動きが重なる。
見つめ合う二人の間に、沈黙が流れる。
「俺、右に行くから、中村さんも右ね」

「わかった」
それぞれの右足を踏み出し、互いに右にずれて、ようやく二人が背を向け合う。
司は振り向いて、夏奈の背中を眺めた。
「……」
寮を出て、司はゆったりとした足取りで門をくぐった。
辺りをさり気なく見回しながら、通学路を歩く。
「司っ」
司の肩が優しく叩かれる。
振り向き、司は安堵の息を吐いた。
アイが両手を後ろ手に組んで、司を見上げていた。うまく司の背中に隠れて、夏奈の視界からは逃げおおせたらしい。
「……よかった」
「あはは、さっきの子は司のお友達かな？」
「ああ、うん。クラスメイトで、中村夏奈さんっていうなかなか危ない子でね……」
「危ないの？」
アイが不思議そうに首をかしげる。
「うん。彼女に秘密を知られると瞬く間に学園に広がる可能性がある

からね。見つかったら終わりなんだ」
「それは、なかなかだね」
「でもよかった。ここで立ち話も何だし、近くの喫茶店にでも行こうか」
「喫茶店！　いいね、いこいこ！」
アイが嬉しそうにその場で跳ねる。
その様子を見下ろして、司は微笑んだ。

喫茶店の扉を開いた司は、凍り付いたように全身の動きを止めていた。
「いらっしゃいませ！！！」
喫茶店のウェイトレス、中村夏奈が威勢よく叫ぶ。
「あはは……」
「二名様、ご案内します!!」
ピンと手を伸ばして、夏奈が言う。
司とアイは、苦笑いで返すことしかできなかった。

　他の席からすこし離れた奥のテーブルに、司とアイは案内された。
「誰か来たらあっちにご案内するから！」
　司が青ざめた表情で夏奈を見上げ、ぎこちなく微笑む。
「あはは、中村さんは何が欲しいのかな？」
「お金！」
「わかった。ここで一番高いパフェを一つ」
「まいど!!」
　夏奈はスキップで席を離れ、そのまま厨房に消えていく。
　夏奈が見えなくなったのを確認してから、司が深いため息をついた。
「終わった……というか、さっき寮で会ったのになんで俺達より先に喫茶店にいるんだ……」
　司は頭を抱えながら言った。
「いやー、他人事じゃないんだけど、なんか笑っちゃった」
「アイは中村さんの恐ろしさを知らないからそう言えるんだよ」
「あはは、ごめんごめん」
　司の恨めしげな顔が楽しかったのか、アイは両肘をついて微笑む。
「でもそっか。もしかしたら、ボクは司と男女の仲として噂されちゃ

うかもしれないんだね？」
「まあ、あの子なら……ありうるかも」
「なんかいいな、そういうのも」
素直な反応に、司が頬を掻く。視線は自然、アイの顔から逸れていた。
「学園で恋愛話が噂されるなんて、ろくなことないよ、きっと」
「大丈夫だよ。ここのみんなはもう大人なんだしさ」
司はもう一度、深いため息をついた。
そのあとで身を起こして、アイとまっすぐ向かい合う。
「……で、今日はどうしたのさ、突然寮に訪れて。なにかあったの？」
アイが唇を尖らせる。
「むぅ、理由がないと会いに来ちゃだめなの？」
「いや、そういうわけじゃないけど……なんか、びっくりして」
「ま、いいけど」
笑いながらそう言って、簡単に言うとね、と前置きしつつ。
「今日は、司と遊びたくてきました」
自分のてのひらを見つめたまま、アイはそう言った。
司は腕を組み、アイの言葉について考える。
「ふむ」

「あれっ、微妙な反応」
「ああ、いや。遊ぶといっても、この島そういう施設とかないからさ、どうしようかと思って」
「うーん。ボクは司とならなにをしても楽しいけどなあ」
「そういうものかな」
「というか、遊んでくれはするんだね」
「まあ、それは……」
　司はすこし顔を伏せて、頬を指でぽりぽりと掻いた。
　司にとってアイは、島に来てからの、それこそ初対面に近い関係性だ。だというのにここまで仲のいい友人のように振舞えるのは、司にとっても不思議ではあった。
　それはおそらく、自分が忘れている記憶に関することなのだろう、と司自身は了解していた。そしてそれを、アイが分かっているのだろうことも。
「司は普段何して遊んでるの？」
　アイに聞かれて、司が伏せていた視線を天井に向ける。
「うーん、ゲームとか？」
「他には？」
　アイがうなずきながら、続きをうながす。

「あとは、学校の課題とか、勉強かなぁ」
「ほうほう、勉強はどんなことしてるのっ？」
「えっと、今はゲームを作る勉強かなあ」
「司、ゲームばっかりだねぇ……」
司はその言葉に、思わず背筋を伸ばす。
「いや！　そういうわけじゃないハズなんだけど、あれっ、俺いつの間にか理人に浸食されてるのか……？」
焦る司を眺めて、アイがくすくすと笑う。
「いやー、お姉さん、司くんの将来が心配だなぁー？」
バツが**悪**そうに、司がアイを流し見る。
アイはもう一度、テーブルに両肘をついた。
「そういうアイはどうなのさ。学生ではなさそうだし、仕事は？」
「へっ？　ボク？」
言葉を探しながら、アイの視線がさまよう。
「うん」
「え、えっと。バイト、してるよ？」
「なんの？」
「えと……監視の、バイト。島の……安全、マモルタメニ。ウン」
「なに、その反**応**。ウソなの？」
アイは両手をぶんぶんと振った。

「いやいやっ、ウソじゃないよ！」
「だとしたら、今守るべき安全は島よりもアイ自身の生活なのでは？」
「ぐっ、それは言わない約束……!!」
「ちゃんとやれてるならいいけど、お姉さんが行き倒れたりしないか俺は心配だなー？」
「えへへー……」
　アイがひとさし指で頬をかいた。
「逆に、アイは普段何して遊んでるの？」
「え、遊び……なんだろ、ダンスとか？」
「……ダンス？」
　司は口を開けたまま、しばしアイの顔を見つめた。
「へえ、なんか意外……」
「お待たせしましたーっ」
　ゆったりとした会話に、大きな声が割り込んでくる。
　夏奈が巨大なパフェをおぼんに乗せて二人の間に立っていた。
　司とアイは揃って夏奈を見上げ、その手に乗ったパフェの大きさに目を見張る。
「なに、これ……!!」

「でかっ!!」
夏奈はにんまりと笑ったまま、テーブルの中央に巨大なパフェをおく。
「ラブラブカップルパフェ・アパッショナートです!!」
そうして、堂々と商品名を口にした。
司とアイが呆然と夏奈を見上げる。
夏奈は二人の顔を交互に見下ろして微笑んだ。
「店長が、何故か私がバイトに入ってからカップルのお客さんがこなくなったからサービスしてやれって。よかったね!」
口を開けたまま夏奈を見上げていた二人がゆっくり顔を見合わせる。
その様子を、夏奈はしばらく見つめていた。
「それでは、ごゆっくりー!」
ぺこりと頭を下げて、夏奈はまた厨房に下がっていった。

・
・
・

司は歩道をのろのろと歩いた。

司は歩道をのんのんと歩いた

そのうしろに、苦笑いのアイが続く。

「ごめんね、司。ほとんど食べてもらっちゃって」

「胸やけが……ひどい」

「う一ん、これはお昼ご飯はいらなそうだねぇ……」

「……今日一日分は食べたと思うな」

足を重たそうに引きずりながら、司が歩く。

「じゃあちょっと歩いて、近くの公園で一休みしようか」

「ん、じゃあそれで」

桜並木を、司とアイが歩く。

ほどなく、桜が咲き乱れる公園——桜公園へとたどり着いた。

「ここって……」

桜を見上げながら司が呟いた。

歩きながら、アイが司のほうを振り向く。

「きれいでしょ。ここ、ボクのお気に入りの場所なんだ」

そう言って微笑み、アイも桜を見上げる。

片手を司に差し出すように伸ばし、軽やかにくるりとまわるアイ。

司はその姿を呆けたように眺めた。

アイが小走りで桜並木を駆けていく。

「こっちこっち」

公園の中央を指さしながら言って、アイは階段を降りていった。
司もそれに続き、並木道を進んでいった。

ボウル型にくぼんだ広場の中央にある、大きな桜の樹。
司はそれを見上げて、立ち止まる。

「……」

「司はこの場所、どう思う？」
アイは両手をうしろについて、足を投げ出すように座っていた。

「ん、まあ」
司はアイの横顔を見て、それから辺りの桜並木を眺めた。
満開の桜。すでに五月も半ばを過ぎてのこの光景は、どこか創作物のようですらある。

「すごく、きれいな場所だよね」
その言葉に、アイが嬉しそうに微笑む。
風が吹き、広場に繁った草花が揺れた。近くには少しではあるが水も流れており、その上には蓮の葉が浮かんでいる。
二人はしばらく、そんな周りの風景を眺めていた。
司がゆっくり、口を開く。

司がゆっくりと口を開く。
「そういえば、ずっと気になっていたことがあるんだけど」
「ん？」
「……その、君によく似た、白い髪の女の子って知らないかな」
司の質問。
アイは表情を変えずに、少しだけ目を細めた。
……司はアイとよく似た、白い少女を知っていた。
いや、知っていた、というと語弊がある。正確には、この島で見かけた、という表現の方が近い。髪はアイと同じく白いものの、その髪は長く、アイとは逆にどこかひどく落ち着いた少女。司はアイと似たような感覚を、その少女に対しても覚えていた。
「……」
無言のまま、アイが前を向く。
司はアイの白い横顔をじっと見ていた。
「それは多分、ボクのお姉ちゃんだね」
「えっ？」
司は咄嗟に身を起こして、アイのほうにずいと顔を寄せた。
「アイって、お姉さんがいたんだ……」
司がアイの顔をまじまじと見る。なるほど、だから似てるのか、と。

アイは静かに微笑んだ。
「うん。ボクが家出してあんな廃墟に住んでいるのも、そのお姉ちゃんが理由だったりするね」
「……そうだったんだ」
「まあ、ちょっとした姉妹喧嘩だよ。別に、仲が悪いとかそういうんじゃなくて……ただ、やり方が異なっただけ」
「……」
言葉とは裏腹に、アイの表情はひどく寂しげだった。
司が二の句を告げないでいると、アイのほうから口を開いた。
「ねえ、司」
司がアイのほうを振り向く。
両膝を抱えて、アイがのぞきこむように司を見ている。
「もう一度聞くけど、学園は楽しい？」
「……」
――学園は楽しい？
それは、アイと初めて会ったときにも聞かれた質問。アイがなぜそんなことを聞くのか、当時も今も司にはよく分からなかった。
その質問は、まるで昔の同級生が、転校先でもうまくやれているかを聞くような態度。
けれども司に答えないという選択肢はない。司は前を向いて、両手

けれども司は答えないという選択肢はない。司は前を向いて、両手を組んだ。
「楽しいよ。とても、楽しい。こんな日が続けばいいのに、っていうのは、ちょっとモラトリアムに染まりすぎている気もするけど。……最近、目標ができたんだ。これまで、変わり始める皆の変化に自分がおいていかれてるような気がして不安だったんだけど……なんか少し安心したというか。いい友達は、できたのかもしれない」
「……」
司がアイに顔を向ける。
「だから、俺は楽しくやれてるよ、アイ」
はっきりとした言葉。
アイの表情には一瞬戸惑いらしきものが浮かんだものの、それはすぐに消えて、かわりに優しい微笑みへと変わる。
「そっか。うん、表情を見るだけで、司の言うことが本当なんだっていうの、わかるよ」
「アイは？」
「ん？」
「君は、どうなの？　仕組みとか、制度とかはよくわからないけど。アイも、あんな廃墟にいないで――。みんなと一緒に遊べればいいのに」

森の中の廃墟に辿り着き、アイは建物を背にして司を振り返った。
「それじゃ、司。わざわざここまで送ってくれてありがとうね」
「いや、こちらこそ。寮まできてくれてありがとう」
「そんなこと。ボクから会いにいくって言った手前……それに、今日はとっても楽しかった」
「うん」
うっそうと茂る森林と、廃墟。アイとのコントラストは不自然なはずなのに、けれども彼女はこの場所にとてもよく似合っていた。
名残惜しそうに、アイが司から離れる。
「じゃあ、またね、司」
「うん、またね、アイ」
互いに手を振る。
ゆっくりと、アイは廃墟の入り口に歩きだした。
「アイ！」
その背中に向かって、司が叫んだ。
アイが振り返り、驚いたような顔を司に向ける。
「ん、どしたの、司」
「制服、可愛かったよ！」
「！」

アイは頬を赤らめて背筋を伸ばした。力の入ったが両手をぐっと握られる。

「それじゃ！」

踵を返して、司は広場を後にした。

「……」

その背中を、アイは赤くなったままで見つめていた。司の足音が遠のき、アイが自然と笑顔になる。

アイは、司の背中が見えなくなるまでその後ろ姿を見守っていたのだった。

・　　　・　　　・

あたりはすでに、暗くなり始めていた。

アイと別れ、寮までの帰り道。見覚えのある背中が、ふらふらと学園への道を歩いていた。

ミリャだ。

「……」

また、何かあったのだろうか？
かといって声をかける雰囲気でもなく、司は何事もないようにと思いながら、ミリャの後を追いかけていく。
來夢学園。校門をくぐり、建物の中へ。ミリャの姿を見失ったところで、ふと、音楽室から聞き覚えのある旋律が流れてきていることに気が付いた。
「これって……」
司が明らかに動揺する。
まばたきもなく、司の瞳は揺れ動いていた。足の動きも硬く、どこかぎこちない人形のように、一歩一歩、吸い寄せられるように音の発信源へと近づいていく。
壊れた人形のような歩き方は、いつしか小走り、駆け足へ。校内、廊下を抜けて、音の場所——音楽室へと駆けていく。
司の他には誰もいない。ミリャの姿もなく、ただただ旋律を頼に足を向ける。
旋律が徐々に大きくなっていく。
焦点は定まらず、いつしか口も開いていた。ふらふらと、見えない何かを捕らえようとするように、意識が、身体全体がゆらゆらと危なげに揺れていく。

……そうして、やっとたどり着いた音楽室の前で、ようやく司が足を止める。

「……」

　ドアノブに手を触れる。

　そのとき、唐突にピアノの演奏は止まった。ゆっくりと、扉を押し開けていく。

「……」

――音楽室には、誰もいなかった。

　無人の部屋に月明かりが差し込んでいる。中央には、美しく輝く漆黒のグランドピアノ。

　大屋根は開かれたままで、響板に張り巡らされた弦が見えた。

　司がゆっくり歩み寄り、鍵盤に触れる。

　周囲を見渡してもう一度、部屋が無人であることを確かめる。

　椅子を引き、腰を下ろして、力をぬいた両手を鍵盤に添えた。

「…………」

　目を閉じ、指を動かす。

――司の耳に、自分が奏でる音が届いてきた。

・
・
・

グランドピアノの前に座る青年が、鍵盤を撫でるように旋律を奏でる。

一音一音に想いを乗せるように、丁寧に鍵盤を叩き――最後の一音が、水面にひろがる波のように空間に満ちていった。

演奏の終了。脱力した青年が大きく息を吸い、ゆっくり吐き出す。

「――」

まばらな拍手は、次第に大喝采へ。

青年が顔をあげる。立ち上がり、拍手を送る人々に頭をさげた。

「ありがとうございます……っ！」

周囲から贈られる賛辞の一つ一つにお辞儀を返した後で、青年が壇上から身を引く。

やがて、その肩が背後から軽く叩かれた。

「？」

青年がうしろを振り返り、目を見開く。

「……!!」

「やあ、ディアくん。演奏、すっごくよかったよ」

そう言って女性が微笑んだ。

ポカンと口を開けて、ディアと呼ばれた青年が、声をかけて来たその女性を見つめる。
　ディアとそう年齢の変わらない、どこか大人びて見える若い女性。短めの髪をさらに後頭部で編み上げており、服装はマフラーやブーツに至るまで、黒系のシックな色合いで固めていた。
　意外な顔見知りの登場に、ディアの表情が驚きに染まる。
「え……なんでソウトメさんが……。だって、もう辞めたはずじゃ……」
　ディアの言葉に対し、女性――ソウトメが苦笑いを浮かべる。
　クールな装いの女性ではあったが、その笑みはどこか年相応でもあった。
「いやー……そうなんだけどねー……。やっぱりなにも言わずにいたのがひっかかっちゃって……これはよくないなーと……」
「……そっか……。でも、よかった。最後にソウトメさんに会うことができて」
「最後？」
　思いがけぬ言葉に、ソウトメが首をかしげる。
　ディアは頷いて返した。
「実は、僕もしばらくこの世界から離れようと思っていまして……」
「……そうだったんだ」

ディアがうなずく。
……そこは酒場だった。いや、酒場という名目ではあるが、雰囲気はどこか高級なレストランやバーのそれに近い。
楽しげに酒を飲みかわす人々たち。そこの中央には壇上があり、まるでどこかのコンサートホールから借りて来たかのような立派なグランドピアノが備え付けられている。
ディアは、今までそれを弾いていたのだ。まわりの様子を眺めながら、ディアが口を開く。
「やっぱり、この世界は優しいです」
どこかのテーブルから、乾杯、という陽気な叫び声があがる。
「どうしてこの世界は良くて、現実はだめなのか……ずっと考えていたんです」
ディアが近くのテーブルに顔を向ける。
ディアの視線の先で地図が広げられ、テーブルを囲む人たちがその上でコマを進めている。
「この世界には共通の敵がいて、目的を共有できるからだとか」
ディアの視線が、壁の掲示板に移る。
「この世界の皆さんは大人で、ルールが守られているからだとか」
そして、もう一度酒場全体をディアが見渡す。

「理由はいろいろあるのかもしれないけど、結局、僕にとって重要だったのは――」
ゆっくり移動していたディアの視線が、グランドピアノに向けられて止まる。
「たくさんの人が僕を認めてくれる世界だったからなんだろうなって。この世界にはソウトメさんやヴィ、ジャスミンさんにワタリさん、そしてアルファがいた。皆がいなくなってから、自分がこの世界に依存していただけだったって、気がついたんです」
「…………」
ソウトメは黙ったまま、ディアを真っ直ぐ見つめていた。
ディアが少し目を伏せる。
「この世界で身につけた力を褒められることはあったけど、それはこの世界でしか使えない。でも一つだけ、現実で頑張っているものを、褒めてもらえたんです。これからはそれを、頑張ってみたいなって」
ソウトメが目を細めて、寂しげな微笑みを浮かべる。
「……そっか、そうなんだ……。……思えば、ボクも始まりはそうだったな……」
目を伏せたソウトメがそう言い、ディアが首をかしげる。
「……そうなんですか？」
ソウトメが頷く。

顔をあげて、ぼんやりとした視線を彷徨わせた。
「当時は理由を考えたことはなかったけど……漫画を描き始めたきっかけは、ディアくんと同じだったのかもしれない」
ゆっくりおろした顔をディアに向け、ソウトメが頷く。
「ボクも、この世界で認めてもらえて始めたから」
「……すごい。やっぱり、ソウトメさんは僕の目標です」
「……へ？」
「だって、ソウトメさんは漫画を出して、ちゃんと証明したじゃないですか。僕、『親愛なるあなたへ』を読んで思ったんです。ソウトメさんが引退すると聞いてすごくショックだったんですけど、ソウトメさんはここにいるんだって。離れていても、漫画でソウトメさんの存在を感じていられるんだって。僕も、そういうふうになりたいです」
ディアの前のめりであまりに素直な感想に、ソウトメの頬が赤らんでいく。
「ちょ、ちょ、なになに！　やめてよーもう！　そういう恥ずかしいセリフ禁止！」
ソウトメがディアの頭をぐりぐりと撫でる。
されるがままのディア。やがてソウトメが手を離し、苦笑いを浮かべながらポリポリと頬を掻いた。

「ても、やっぱり会いにきてよかった。なんか、逆にボクが元気を貰っちゃったけどね」
「そんな。僕も会えて良かったです。漫画も、まだまだこれからですよね？」
「うん。漫画、ちゃんとディアくんに届くよう頑張るよ」
「はい。応援しています。師匠」
ディアの言葉に、ソウトメがキョトンと目を丸くする。
その後で、あきれ顔とともに、はぁ、とため息をついた。
「まったく、君ってやつはも一」
けれどもその表情は嬉しげで。腕を組んで胸を張って、芝居がかった態度で口を開く。
「ディア、お主に教えることはもうない。これからは、お主自身の道を行くがいい」
「は、はあ……」
「あ……あれー……？」
渾身のギャグが通じなかったことに肩透かしを食らうソウトメ。
拳を口元にあてながらごほんと咳払いをして、とにかく、と話を戻した後、ソウトメが改めてディアに向き直る。
「アルファさんを守ってあげてね」
「え？」

「あの子は……一途で、自分をないがしろにしそうなところが、お姉さん心配なんだ」

「……」

ディアの言葉が止まる。

ソウトメがもう一度、ディアの頭に手を乗せてぐしゃぐしゃと撫でた。

「我が弟子よ、よろしく頼むぞ」

・　・　・

――司が鍵盤からゆっくりと指をあげる。

旋律の余韻がまだ部屋の中に漂っていた。

鍵盤の前に座ったまま、司が顔を上げる。

……一人の少女が、そこに佇んでいた。

「……」

長い白銀の髪をなびかせた、白い少女。

少女は涙を流していた。

二人の目が合い、沈黙が流れる。
少女は扉のほうを振り返り、ドアに手をかけた。
「待って！」
背中をむけたまま、少女は動きを止める。
司は立ち上がった。
「君は……」
言葉が途切れる。
少女は背中を向けたまま、微動だにしない。
「君は、どうして泣いているの」
少女は司に背中を向けたまま、俯かせていた顔を上げた。
なにかを確かめるように、自分の頬に細い指先で触れた。
その手を胸元にもっていき、しばらく見つめたあとで、ぐっと握る。
「……どうして。どうして私は泣いているの……？」
月の青い光が司とグランドピアノを照らし出す。
雲が月にかかり、少女のまわりだけがうっすらと影を帯びていく。
長い沈黙。
雲がゆっくりと流れ、再び少女に月明かりが戻ってきたところで、
少女は今度こそドアを開けて踵を返す。
司は立ち上がり、その背中を追いかけようとして、膝から倒れ落ち

る。

「……!!　くそっ……なんなんだっ…………!!」

司は左手で倒れた身を支えて、右手で額を押さえた。

その指の隙間から、ユウの背中をのぞく。

「……っ。どうして……」

全身から全ての力が失われて、司はその場に倒れ込んだ。

「そんな……」

司の目が閉じられ、暗闇が訪れた。

かろうじて残って意識が、少女の可憐な声だけを拾う。

「……さようなら、司」

「トライメント計画。表向きは、『模擬就学制度による若年者再就職支援プログラム』として語られている計画。その真なる目的は、『新たな時代を正しく切り開き、社会問題を最適化する仕組みを作ること』にある。かつて、今を変えたいと願った少女が叶えた夢の第一歩。それがトライメント計画だった。——そんな計画に、一つの事件が起きる」

桜公園。
月明かりに照らされたそこに、アイは一人で佇んでいた。
夜にも関わらず舞い散る花弁。周囲に舞い落ちた花びらを、水面が
穏やかに受けとめる。
アイが顔を上げる。
花びら越しの夜空がアイの瞳に映った。
「……………」
浮かぶ満月と、流れていく灰色の雲。
アイの瞳に映るそれらは、微かに揺れていた。
「……………」
遥か空の天蓋を見つめ、彼女は歌うように告げる。
誰ともなく、あるいは、自分自身に語り掛けるように。
「事件を起こした者の名を、人々は誰も知らない」

ProloguE -LichT-

「たとえばさ、ストレスを制してるのは気合じゃなくて、副腎だったりするわけだよ」

――波打ち際。大きく広がる砂丘の上で、満月がきれいな夜空に輝いている。

この世のものとは思えないくらい、解像度の高い美しい風景。さざ波の音に身を浸しながら、二人の人物が砂浜に座り、昇る太陽を見つめていた。

「え？　ああ……うん？」

「だからリヒトに必要なのは気合を入れて頑張ることじゃなくて、もっと副腎くんをいたわってあげることでしょ。結局は、身体的な問題に行きつくんだから」

リヒトと呼ばれた青年は、ある意味では突拍子もないそんな言葉に驚いた表情を見せる。

一方、隣で説教めいた口調になっているのは、リッカ。リヒトと同世代の少女で、いまはショートカットの髪が夜の海風に揺れていた。

手に持つ杖の先っぽで砂浜に落書きをしながら、リッカが続ける。

「だからやっぱ、何をするにしても、まずは頭の中の引っ掛かりを解消していくしかなくない？」

「だからそんなの、たいていの場合どうしようもないじゃん」

「それでも真正面からそうするしかないって言ってきかないからアドバイスしてるのに」

「ん――……まぁ……。というか、僕のつまらない愚痴を広げなくていいんだよ」

二人はいつもの通り、他愛のない話をしていた。

いつもとちょっとだけ違ったのは、リヒトが珍しく日常生活の愚痴をこぼしたこと。なので、かねてより思うところのあったリッカは副賢くんなんて比喩を持ち出したのだった。

リッカの態度に、リヒトが溜息を吐きながら返す。

「僕のはアレだよ、アレ。女子がよく言う、答えを求めてるんじゃなくてただ話を聞いてほしいっていうアレ。今の僕はそんなスタンスなの」

「女々しいなぁ」

「全くもってその通りだよ。……とにかく、このままじゃ息抜きが目標にすげ変わりそうだからさ。本格的にガチハマりする前に、僕はそろそろリタイアしておくよ」

「そっか」
リッカの返答を受けて、リヒトがゆっくりと立ち上がる。
ふあ、とあくびでも出そうな言葉遣いのまま、「じゃあ、ご飯だから」なんて告げた。
「野菜いっぱい食べろよ～」
「はいはい」
リッカの変わらない笑顔を見て、大きくため息をつくリヒト。
リヒトが指を空中に走らせると、その姿は光の粒子になって朝日の輝きに溶けていったのだった。

遮光カーテンで閉じられた暗がりの部屋。
ベッドの隅に座った青年――佐藤理人が、頭からヘッドセットを外した。
仮想世界からの帰還。少しだけ、疲れた目をぐりぐりと揉む。
「……はぁ」
両膝を開いて、うなだれるようにため息をつく。
物が少ない簡素な部屋。床に並ぶ、ビニールで括られたゴミの
数々、机の上には[illegible]

数々。机の上には破られた封筒や、公共料金の支払い書が乱雑に折り重なっていた。

　そんな中、壁に掛けられているのは、部屋の惨状にそぐわないほど綺麗に整えられたス一ツ一着。

「……」

　理人が立ち上がり、黒い手袋を外して、ベッドに投げ捨てる。

　ふらふらと歩きながら、冷蔵庫へ。中からコンビニ弁当を取り出し、それを冷蔵庫上の電子レンジへと放り込んだ。

「……」

　タ一ンテ一ブルが回る音を前に、理人が暗闇に浮かぶ薄明かりを呆然と眺める。

　しばらくしてその場を離れると、手に取ったのは机の上に置かれた紙封筒。

　中から紙を取り出すと、そこには書類選考の通過と面接を案内する内容が書かれていた。

　面接日、十月二十八日。

「あ一……くそ……」

　そうこうしているうちにレンジが鳴り、もやもやしたままコンビニ弁当を取り出そうとしたところで、今度は机の上の小さな紙が目に入った。

その内容に、改めて理人が目を細める。
「……残り十八万かぁー…………」
深く長い溜息。
「ありえねー……」
低い声で唸り、項垂れる理人。
椅子をレンジから取り出し、机の端に追いやられたビニール袋から割り箸を取り出す。
弁当の蓋を開けると、水蒸気が水滴となって滴り落ちた。
「………」
弁当の中身は、具のないペペロンチーノ。
「……あっはは」
理人が自分の行為に思わず笑う。
ひとしきり笑った後で、今度は大きな大きなため息をついた。

・　・　・

「――およそ三か月ほど前のこと。

「……いつものようにゲームをしていて一区切りつけた後、理人は部屋でぼうっとスマホをいじっていた。

部屋の中に冷蔵庫の駆動音以外の音はない。時折静寂を上書きするのは、すぐ近くを走る電車の音。電車が通るたび、遮光カーテンから漏れる光が明滅する。

「――」

電車が通るたび、理人は目をつぶっていた。そして、叫ぶように口を開く。

がたんがたんと、嫌になるほど耳につく通過音。叫び声を載せて、電車はやがて遠ざかっていく。その、繰り返し。

「ん…………」

ふたたび携帯に目を戻したところで、画面に映るのは電子書籍の数々。タイトルは「観覧履歴に基づくおすすめ商品」。

並べられた自己啓発本を、理人はフリックで飛ばしていく。

やがて、ジャンルをマンガへと変更。一覧を読み飛ばしていくうち、その指が、とある本のところではたと止まった。

――親愛なるあなたへ。

「……ふーん……」

タイトルをしばらく見つめた後、サムネイルを指で触れる。

あらすじを軽く流し、その下、星4のレビューに目を止める。

『トーンコミックスで連載していた作品です。事前予告なく唐突に打ち切られました。

内容は主人公の高校生編と小学生編が交互に展開されていく青春群像劇です。

物語の主軸には司がいます。一見主人公に見えるこのキャラクターですが、個人的に本作の主人公は、各キャラクターが交差する舞台、レイコン研究所そのものだと思っています。

高校生編では廃墟で登場する研究所。

小学生編で展開される研究所まわりの優しいストーリーがどのようにして変化してしまったのかが楽しめます。

伏線の張り方はよく、回収されることがなく終わってしまったことが本当に残念です。

※追記　最近になって……　（続きを読む）』

「……」

目が追うままに、畳まれた続きを開く。

『……トーンコミックスが倒産しました。

同誌に連載していた作品が他誌にて連載継続されていたりするので、こちらも再開が期待できるかもしれません。

「というかして下さいお願いしますなんてもしますから。』
「……ふうん」
連載雑誌の倒産。
そこまでよくある話ではないが、珍しいというほどのものでもない。
なるほどね、なんて呟いたところで、スマホの通知音が鳴りポップアップが割り込んできた。
『野方：よっす、久しぶり！　今暇だったらリコーダでイベントいかない？』
「はぁ……」
ポップアップをアクティブにして、理人が文字を打ち始める。
『おお一久しぶり。そしてごめん、今日は用事があるから……』
断りの常套句。
けれども途中まで打ったところで、送信より先に再び文字が投下されてきた。
『あと、本当申し訳ないんだけれど、前に理人が担当していた業務でちょっと聞きたいことっていうか、助けてほしいことがあって』
「……………………」
顎に手を当て、しばし思案。
少しだけ表情をゆがめながら、理人は入力途中だった文字を消し

て、改めてメッセージを打ちこんだ。
『わかった』

町の港、積まれた木箱の上に座るリヒト。
その隣に、現実とは少しだけ姿の異なる「ノガタ」が胡坐をかいている。
……呼び出しの理由は、ノガタがメッセージで送ってきた通りの話だった。前に担当していた業務。その響きに、リヒトはどこか乾いた笑いを浮かべる。
内容自体はほとんど確認事項だったため、いくつか言葉を交わしただけで問題は解決した。これならチャットで十分だったよな、とリヒトはひとりごちる。
「いやーごめん！　過去のこと掘り起こすようなお願いしちゃって」
メインの話が終わり、ぼうっと出向していく船を眺めていたリヒトに対し、ノガタが大げさに頭を下げる。
「ん……いや……。別に悪い思い出ってわけじゃないし……むしろ、いろいろ残したまま突然辞めたりして悪いと思っているよ」

「いつまでも夢を追いかけられるリヒトは、ほんと眩しいよ」
「……………」
リヒトの目がわずかに伏せられる。
そんな様子を見て、ノガタはふっと視線を外した。
「で、どうなの。再就職の方は」
「ノガタの名前をみたらログアウトしたくなったって言ったらわかるかな」
皮肉めいた言い方。
ノガタが思わず笑う。
「それは本当に悪いことをしたなー。反省しているよ」
「まじで今はガチ煽りだから、それ。頼むから僕が受かってからにしてくれよ」
「おお……なんか悪いね。しかし、再就職かぁ。俺も仕事辞めてやろうかって思ったことはあるけど、いざそのための準備とかし始めると結構萎えるっていうか……。いや――……前向きに辞めていくやつを見ると、なんかこう、すげ一な一って思うよ」
「よくやるな一のすげ一な一でしょ、それ」
「あははっ！　いやまあね、うん」
苦笑交じりの溜息を返すリヒトに対し、ノガタが乱暴に頭を掻く。
一応、悪いと思っているらしいことは、仕草からは見て取れた。そ

の様子を見て、リヒトが溜息を重ねる。
「だめだ、つい仕事の話題をしちゃうな」
あわせたように、ノガタが長い息を吐く。
それから両手を掲げ、叩いた。
「とにかく！　仕事の件は助かった。ありがとう」
「いえいえ」
「イベントで誘ったのに、結局いけなくて悪かったな」
「悪いと思ってるなら、今度ご飯おごってよ。社会人さま」
「ああ、いいねー！　おごるおごる」
そう言って箱から立ち上がるノガタ。
それから振り返り、リヒトを見下ろす。
「実際、受かったら教えてくれよ。その時ご飯に行こうぜ。まじでおごるからさ」
「はいはい、サンキュ」
「んじゃ、俺はさっそく教わったことまとめるから落ちるわ」
「あいよ」
ノガタ、空中に手を掲げる。
何かを指で操作していくと、ぴたりとその手がとまる。
「…………」

「どうしたの？」
「ん……いや……」
言葉を濁し、一度視線を外した後、ノガタが再び笑顔に戻る。
「いや、気にしないでくれ。とにかく、またな」
「ああ、また」
ノガタの姿が光の粒子になって消えていく。
完全に消え去り、フレンドリストが灰色になったところで、リヒトはがくっと寝転んだ。
「はぁ――っ……」
脱力。
遠くで船の汽笛が鳴り、オレンジ色に染まった空に夜のとばりが降り始める。
暗がりの街に、街灯の明かりが灯りだしていく。
「……なんか……疲れたな……」
ぼうっとした表情。
そんな頭上に、ふっと声がかけられた。
「大丈夫？」
聞き慣れた声に、リヒトがゆっくりと身体を起こす。
声をかけて来たのは、リッカだった。
「あ……うん。お疲れ」

「どしたの、こんなところで。待ち合わせ？」
「いや、いま終わったところ」
ふうん、とリッカが言って、リヒトの隣の木箱に腰掛ける。
そのまま、ごろん、と仰向けに転がった。
「あ―――疲れた」
「……………」
真似なのだろうか。あるいは、彼女自身何かに疲れてここに来たのだろうか。疑問ではあったが、何が、とはリヒトは聞かなかった。
無言のまま、リッカが夜空を見上げる。その目に映るのは、夜空に浮かぶ白い月。
「月が綺麗だね」
「まぁ……そうだねぇ……」
リッカの言葉にあわせて、リヒトが空を眺める。
あまりに綺麗な偽りの夜空。
しばらく二人してぼうっと空を眺めたところで、ふと、リッカがくすりと笑って言った。
「あたしさ―……しばらくログインとか、連絡とか、できなくなると思うんだよね」
その声に、リヒトが顔を向ける。

「まあ……リッカの神出鬼没は今に始まったことじゃないし、別に自由にやっていいと思うけど……」

「…………。

　言っている途中で、リヒトの目が大きく開いた。

「えっ？　連絡もできなくなるの？」

「おっ、さみしいのかー？」

「いや、普通になんでかなって……思っただけですけど……」

　普段のリヒトらしからぬ様子。そのリアクションに満足したか、リッカはあははと笑って。

「といってもー年くらいだけなんだけれどね」

「ええーっ！　一年って結構ながいじゃん！」

「そうかなー……そうかもー？」

　首をかしげるリッカ。

「ていうか……なに？　仕事関連？」

「いやーーー……」

　リッカ、両手の指先を合わせ、口元を覆う。

「……もう一度、学生にもどる的な……」

「……なるほど？」

「いや、結構まじめなやつで。職業訓練的なね？」

「あー、なるほど」

そーれは……」

職業訓練。そう言われてしまうと、リヒトにも色々と考えてしまうところはあった。

「それじゃあ、一年間集中したいってこと？」

「ん、ん――……」

手慰みをするリッカ。

「まぁ、そういうのもあるけれど……一年間、携帯とかインターネットとか、使えないっぽくて」

「ええっ！　なにそれ、軍隊でも入るの⁉」

「いやいや、結構のんびりはできるみたいだよ」

「のんびりって、どこで」

「島で」

「島で⁉」

驚くリヒトに対し、リッカは「職業訓練」の概要を説明した。

リヒトが両腕を組み、空を見上げて頷く。

「なるほどね――……」

「サイトは見れた？」

「あー……うん、見れたけど、全然募集活動とかされてる様子ないし、こんなんどこで知ったの、リッカ」

「あたしは仕事で知り合った人に教えてもらったんだけれど、確かに

大々的にやってる感じじゃないよね」
　トライメント計画。
　サイトの内容とリッカの話の内容から、リヒトが「うーん」と考え込む。
「仕事ねぇ……」
「なによ」
「いやさ、誰かを入会させるのに、仕事とか趣味とかで仲良くなってからそれとなく誘う手法があるからさ」
「……は？」
「だってさ、一年間の衣食住も支援されるって、ぶっちゃけ結構あやしくない？」
「……ぐぬぬ」
　リヒトの的確な指摘に、リッカがこちらも腕を組む。心当たりはあるらしかった。
「いやまぁ、否定はできないけれど……話を聞いたら結構ちゃんとしてたし……」
「でも島で隔離されるんでしょ？　ネットも使えないって、洗脳するのにうってつけじゃん？」
「確かにそうだけれど、ネットが使えないのは勉学や周囲とのコミュニティが活発になるようにって言ってた」

[illegible]って言ってたし……」

「いやいや、それと全く同じ文句を僕聞いたことあるんだよね。真実を見つけるためのレクリエーション的なやつをさ。それだけ大規模な計画なのに参加の窓口が小さいのも気になるし、これだけの活動資金、金の流れが怪しいって！　新手の新興宗教とかの可能性すっごい高いよ！　もう少しちゃんと調べてから決めたほうがいいって！　まじで!!」

「うぅ～………………」

熱の入ったリヒトに対し、リッカが唸る。

そうして、ぽつりと。

「言わなきゃよかった……」

「！」

リッカが涙目になる。

リヒトは慌てた。

「いや、うん、ごめん。情報が少なかったからついね？　大丈夫大丈夫大丈夫、ちゃんと調べたんだもんね。なら大丈夫だ」

「もういい。今日は落ちるもん……」

「ええ――っ!!　ごめんごめん！　ほんとごめんって!!」

思わずといった様子で立ち上がるリヒト。

全力でなだめるリヒトに、ふいっと顔を逸らすリッカ。

「別に、ぜんぜん、これっぽっちも怒ってないけれど、二十時から妹が帰ってくるので落ちます」
「**絶対**おこってるじゃん!!」
「怒ってない！　ばーか!!」
そう言いながら光の粒子になって消えていくリッカ。
「うわぁ——!!　それずるい!!　まって!!」
「ばいば——い!!」
大げさに手を振るリッカ。
リヒト、消えていく粒子をかき集める様にすがる。
「ほあ————っ！」
完全に空に溶けた光。
リヒト、両膝を地面につき項垂れる。
「やっちまった————っ」
その様子に、周辺を行き来する人々が視線を送る。
しばらくうずくまったままのリヒト。
「……はぁ、まったく……」
つぶやくようにでた言葉。
長い髪を顔に被せながら、ぬらりと起き上がる。
そしてもう一度ため息。
「業の余裕がない表れなのか　またまた元からこんなやつだった

僕の気持ちは素直なのか……はたまた……

か……。どちらも心当たりありすぎてわかんないなぁー……」

三度目のため息。

頭を抱えているリヒトを、わずかに顔を出し始めた月明かりが照らしていた。

「そんなにため息をついたら、幸せが逃げてしまいますよ」

鈴のような声が、理人の耳朶を打つ。

――その様子を、どこから眺めていたのか。

「……？」

振り返る。

現れたのは小柄な――少女、だろうか。ローブをかぶっていて、その素顔はうかがい知れない。

ちらりと白銀の髪が見えた気がしたが、リヒトとてここでの容姿はそんな感じだ、別段特別なことはない。

「……ん」

リヒト、すかさず空中へと指を走らせる。

フレンドリストを開き、一覧をさらっと確認する。

『ノガタ』、『リッカ』。続いて並ぶ灰色の文字を見て、手を降ろす。

「……えっと……はじめまして？」

「フードの人物が両手を前に、丁寧にお辞儀した。
「はじめまして。私の名前はアカシャ。少しお話を聞かせていただいてもよろしいでしょうか？」
フードの下で微笑む少女、アカシャ。
疑いの眼差しを向けながらも、リヒトは小さく会釈する。街中で会ったならともかく、ここはネトゲの中だ。声を掛けられたくらい、どうというほどでもない。
「……まあ、ハイ」
「よかった」
本当にうれしそうに、少女が少しだけ跳ねる。
その様子にほっとしたリヒトではあったが、けれど、少女のうっすらと見える口元は、怪しげに笑っているようでもあって。
「あなたは今、未来に大きな不安を抱えていませんか？」
「宗教の勧誘かよ！！！！」
会心のタイミングで、思わずツッコミが炸裂する。
……あたりがシンと静まり返った。フードの少女は、どことなくたじろいでいる。
「…………あ、いや。すみません、続きをどうぞ」
「あの……あなたは、未来に不安を抱えていませんか？」
「聞き間違いじゃなかったかーーー

聞き間違いじゃなかったか――――」
リヒトが頭を抱える。
そのままチラリとアカシャと名乗った少女の顔を覗き見るも、ローブの下から垣間見えるまなざしは真剣だった。
少なくとも、からかっている風ではない。その様子に、リヒトはぎゅっと目をつむってから、応じる。
「……あー……ぇー……未来に不安ね……そりゃ、ありますよ。いろいろと」
「よかった」
「よかね――よ!?」
思わず体が動いたリヒトがハッとする。
「てか、なんなんですか？　もしかして、マジもんの勧誘ですか？ネトゲで!?」
「どうしてわかったのですか…？」
「もうつっこまないぞぉ――」
いよいよ腹も座ってきたし、相手のリズムも掴めてきた。
少なくとも冗談ではなさそうだ。リヒトは少しだけ真面目な態度で、少女に向き直る。
「えっと、きっぱり断らせていただきますけど、そういうのは間に合っているので大丈夫っす」

言い放ち、リヒトは踵を返す。
慌てたのは少女のほうだった。
「えっ。ま、まってください」
少女が小走りでリヒトへと並ぶ。
「あの、もう少しお話だけでも……」
「いや、ほんとに大丈夫です……」
「お、お願いします。あなたにとってきっと悪くないお話で……」
「いや―ほんとにすみません……」
小走りで街中を進んでいく二人組。期せずして、二人は周囲の注目を集めていた。
そのまま二人は港から離れ、木材で舗装された道を上へと昇っていく。
必死にすがりつくフードの人物に、押しやられていくリヒト。
やがて、道の突き当りに差し掛かったところでリヒトがピタリと足を止めた。
「ログアウトするか……」
いい加減しびれを切らしたところで、空中に手を走らせるリヒト。
その様子をみたフードの人物が両手をばたつかせて慌てる。
「なんで……どうして……こんなはずじゃ……」
みるみる青ざめていくフードの人物。

みるみる青ざめていくフードの人影。
「……」
目的はどうあれ、少女にそうまでしょぼくれられてしまうというのは、さすがにリヒトにとっても気まずくはあった。
とはいえ、このままだとずっとついてきそうな少女に付き合っているほど暇ではない。操作を進めていき、ログアウトのボタンが浮かび上がる。
そこで、少女はぽつりと。
「ヴィがいなかったら計画が……」
思わずといった様子で漏れる言葉。
リヒトの手がボタンに触れる直前で止まる。
「……ヴィ？」
「え……？」
「……いま、ヴィって言った？」
リヒトの態度が明らかに変化する。
その様子に、フ一ドの少女がハッとした。
「あ……」
少女が視線を逸らす。
手はもじもじと、何かを隠していますと言わんばかりの態度。
「し、知りません……」

「……」
「何も知りません……」
だんまりとする様子を、リヒトが不思議そうに眺める。
「……だれだ……？」
フードの人物から視線を外し、どこでもない場所を見つめながらリヒトが考え込む。
少しして、ぼそりと、
「……当時の僕を知ってる人かぁ……」
「……」
少女は答えない。
リヒトが一歩、少女に詰め寄る。
「もうイタズラは大成功なわけだし、そろそろネタバラシしてくださいよ」
「……」
下を向いていた少女が、恐る恐るといった様子で顔を上げる。
そしてじっとリヒトを見つめる少女。
「……」
ただ、少女の様子はリヒトの予想とは少しばかり異なっていた。リヒトが首をかしげる。
「どうしたの

「どうしたの？」
「あの……」
一度言い淀んで。
決死の覚悟で、ネタバラシ――をされると思っていたリヒトに対し、少女はリヒトの顔を見ながら、こう言った。
「もう一度、学園生活を送ってみませんか？」

・・・

――十月二十八日。

「……」
朝。洗面所から、歯ブラシの音が聞こえてくる。
普段は寝静まっているはずの部屋は、もう明かりがついていた。続いてうがいの音が響き、きゅっ、と音を立てて古びた蛇口が垂れ流していた水をせき止める。
洗面所から出て、うっすらと埃をかぶった鏡の前へ。
理人は、スーツを着ていた。
前髪をいじり、少しだけもたつきながらネクタイを締める。鏡に映

る背後、普段使っている奥の部屋、その机の上はきれいさっぱり片付けられていた。
　その手前には、少しだけくたびれた通勤鞄が置かれている。
「……」
時計を見れば、ほぼ予定通りの時間。
鞄を掴んで、理人は外へと歩き出す。
朝の健康的な時間帯。
　まぶしい光に目を細め、それこそアンデッドみたいだなと、どこか他人事のように笑った。

『気を悪くしないで、客観的意見として聞いてほしいんだけれど』
電車内。
手すりの感触を思い出しながら、理人は携帯を眺めていた。
見ているのはトークのログ、相手はあの野方。理人の指が動き、ログを辿っていく。
『理人は優秀だと思う。能力は高いし、アイデアも優れていて、説明能力にも長けている』

『そして、表立っては見せないけど、内にすごく熱いものを秘めている』

　長い長い文章に、理人は目を伏せる。

『学生時代はさ、そんな理人の熱さにみんなが惹かれて共同制作を楽しんでた』

『でも、作品を終えるごとにチームは縮小していって、新たなメンバーを加えていって』

『俺たちだけが残った』

『あの時うまくやれていたのは、気心が知れて、熱量の方向性が同じ仲間が集まっていたからだと思うんだ』

『けれど社会は違う。理想じゃ飯は食えないし、会社で必要なのは飽くまで利益をあげることだ』

　胸の前に掲げた携帯を、ゆっくりと降ろす。

『多くの人は定時に帰って自分の時間を大切にする』

『言葉を選ばずに言えば、みんな、理人ほど本気にはなれないんだよ』

　ぶらりと垂れ下がった腕。

　携帯の画面は明るく光る。

『理人、夢に囚われるな。まずはアイディアじゃなく確実にこなせて利益を上げられる自身のニーズに絞って売り込め』

『お前にしかできないことじゃなく、仕事を確実に完遂できる能力をアピールすれば、理人なら合格するはずだ』

理人がふっと笑う。

脱力したように、首を倒す。

『まあつまり、次も理人は落ちるに1万ペリカ』

『夢にしか生きられない、理人はそういうやつだ』

『肩の力は抜けたか？　面接、適当に頑張れよ』

「……」

ログを最後まで見終わって、理人は携帯の電源を落とした。

『もう一度、学園生活を送ってみませんか？』

とあるオフィスビル、その廊下。

自販機や観葉植物と並んで、あの少女の発した文句と同じ言葉がポスターになって貼られている。

ビジネスと夢が同居しているみたいで、どこか不揃いだな、と理人は思った。

「次、十一番の方。面接室までお願いします」

似たようなスーツ姿の人が並ぶ中で、十一番――理人の番号が呼ばれる。

「はい」と返事をして、案内係のもとへ。

「廊下を少し進んで、面接室と書かれた手前の扉になります」

ありがとうございます。返事を返し、先へと進む。

入念に磨いた革靴がふかふかのマットの感触を捉えていく。

自然、じわりと鞄を持った手に汗がにじんだ。

『自分を変えようとしても難しいとは思いませんか。人の心はその肉体に縛られ、果ては環境までも縛られる』

『人の選択は常に、外的環境と身体的環境によって支配されている』

少女の言葉が頭の中で続いていく。

鏡のない中で、理人はネクタイを軽く締めなおした。

『目の前に広がり見えてしまう不安から逃げるのは生存本能です』

『でも、本能に対して理性的に抗っても、どうしようもできない環境に突き落とされてしまう』

面接室。急遽用意された張り紙に書かれたその名をしっかりと確認。

扉の前に立ち、一呼吸。

『だからこそ』

『トライメント計画があらゆる障害を取り除き、再挑戦の機会を創り

ます』

その言葉に。心を動かされた自分が、間違いなくそこに居たのだ。

ノックは二回。どうぞ、の声に導かれて、理人がドアノブに手をかける。

響くのは、白銀の少女のあの鈴のような声。

『試してみませんか、もう一度』

・・・

――三月某日。

とある大型客船に、理人はいた。

三階デッキ。とある離島へと向かうその船の中で、手に持った一枚の紙が強い風を受けてバタバタと騒ぐ。

『合格通知』。

紙面に書かれたそれを理人はじっと見つめて――はあ、と小さく息を吐いた。

そのまま、その紙をぐしゃっと丸める。

「……」
ふらふらと、足はゴミ箱の下へ。
そこに紙ごみとなったそれを放り込もうとして少しだけ逡巡し――
「……」
結論は変わらず、それをゴミ箱へと放り込んだ。
かさりと音を立てて、紙くずがゴミ箱の中へと沈む。
「…………」
見下ろす理人の表情は、どこか複雑だ。
けれども乗客たちはそんな理人の様子を気に留めることもなく、海の果てに見える島を指さして興奮している。
――御雲島。
行き先は、そういう名前の島らしい。
乗客たちの騒ぎに惹かれるように、理人も甲板へと足を進める。
二人組の少女が、一眼レフカメラのシャッターを切っているところに遭遇した。
「いや一すごいね。見渡す限り海だし、本当に孤島だよ」
「これは……本当に壮観だな……」
姉妹だろうか、理人と同年代の二人が話に花を咲かせている。
特に話しかけることもなく、理人は島へと目をやった。
御雲島。これから自分が一年間、暮らすことになるところ。ぱしゃ

ぱしゃとシャッター音が続いているため、少女たちはなおも写真を撮っているようだった。
「姉さんとは別のグループになってしまったのが少し惜しいな……」
「ええーっ！　流花は勉強に集中できてよかったー、とか言うと思ってたのに、いが一い！」
「もう一度、姉さんと学校生活を送るのも楽しそうではあるなって思ってたからさ」
「なるほど、それもそうだね一。ま、お互い、いい人がルームメイトになるといいね」
「だな」
島が見えてきたことが船内放送で鳴り響き、急激に人が増えてきた。
その様子を見て、理人は一足先に退散する。
遠のいていく人々の声。
船内につながる扉の前に立ち、ドアノブに手をやる。
すると、窓越しに人が立っていることに気が付いた。
……タイミングの悪い。
相手も理人に気付き、一歩後ろへと下がる。
理人は扉を引いて、こちらも一歩下がり、先に扉の前に居た青年に

道を譲った。
「ありがとうございます」
「いえいえ」
青年が扉をくぐる。
こちらも理人とおなじくらいの年頃。すれ違いざま、その青年の表情がどこか曇っていたのが気になりはしたが――理人はそれ以上特に考えず、青年とは反対側に扉をくぐった。
ついてくる人物がいないことを確認し、後ろ手に扉を閉める。
「……廊下を進んでいくと、これから外へ向かう人々の流れに逆らう形になった。
島が近いからだろうか、船が揺れ、少しだけ足をすくわれる。
とっさに壁に手をつき身体を支えたものの、揺れはだんだんとひどくなっていった。
理人は顔を俯かせ、しばし静止。ようやく揺れが収まったころ、上を向いた理人の顔は――ひどく、青ざめていた。
「やっぱ……だめだこりゃ」
三半規管の大暴走。
ありていに言えば、船酔いだった。

TrymenT
—今を変えたいと願うあなたへ—
II

2020年5月30日 発行

脚色
えある

原作
TrymenT

カバーイラスト
雫将維・クロノミツキ

本文イラスト
雫将維・クロノミツキ・mocha

カバーデザイン
shotaro ichinose

公式サイト
re-tryment.com

公式Twitter
@TrymenT_PJ

発行
TrymenT

本書の無断複製、無断転載、無断アップロードを固く禁じます。

©TrymenT AlL RightS ReserveD.

TrymenT

目次

登場人物名簿

普通の学園生活

DeaR KnowS

ProloguE -LichT-